

く善い青年に致しました。

第四十九 母の石碑

芝田町一丁目に倉田貞助と名札の打つてある大きな門構の屋敷があります。この家では、此近傍で貞女といひ賢母と評判された細君が亡くなり、野邊の葬りをしました。十五才になる忠雄と、十三才になる由太郎と、五つになるおちかの三人は、二人とない大切な母を失ひ、母さんの愛情は消えて、家庭は淋しくなりました。未だ年のゆかぬおちかは、可哀そうに夜になると、毎晩悲しう聲を、

お近「お母さん、お母さん。」

と云ふて夢しがつて泣きますから、お父さんは唯だ、

父「お母さんはよい處に行つたのだ。」

と云ふて慰むる外に言葉もなく、これには閉口する許りでしたが、自分も又其悲しいお近の聲をきく度毎に、胸は裂くる許りに亡き妻の事を思ひ出して、唯だ涙をこぼすばかりでありました。

月日の経つのは早いもので、昨日亡くなつたかと思ひました母の一週忌も、おはや明日となりましたから、父は母の爲めに立派な石碑を立て、當日は三人の子供を連れ、青山の墓地に、墓参りに行きました。其石碑の表には倉田貞助の妻、忠雄、由太郎、おちかの母花子と書き、裏には明治三十三年十月十八日永眠と書いてありました。父は三人の子供を石碑に近く呼び寄せて

父「お前達は此石碑に書いてある文字を決して忘すれてはなりません、この石碑に、忠雄、由太郎、おちかの母花子と書いてある通り、お前達の心にも確りとこの文字を彫りつけておいで、若しお前達の内誰でも不品行ものになつて、お母さんの面に泥をぬるやうな事がある時は、必ず其者の名には

漆灰を埋めて、其名を消してしましますよ、いゝかい自分の名を消されるやうな者になつてはいけぬよ、お母さんは生きておいでなされる時は、貞女賢母と云はれた事をよく覚えて、母の名に對して、決してわるい事をしてはつけなすよ。』

と誠にすすと、三人の子供は涙を流しながら、父の言葉をよく心におさめて、母の墓所をあとに見て家に歸つて参りました。

明くれば明治卅五年、忠雄は東都中學の第三年生となり、生意氣盛りの青年時代となりましたから、いつの間にか悪青年の仲間につり入れられ、毎日々々學問はそつちのけにして、親を欺しては金を引き出し、晝の内は、今日は牛肉店、今日は汁粉屋、今日は銘酒屋、今日はピーヤホールと其處此處の區別もなく遊び歩き、夜もとびあるき墮落も墮落、手も付けられぬ腐れものとなりました、東都中學よりは退校を命せられ、親切な品行のよい堅氣な朋友からは見離

され、親には毎日の様に意見をされますが、馬の耳に風、豆腐に鏡、何の諫めも聞き流し、何の意見も心に留まりません、毎日家を飛び出し、悪事といふ悪事は爲盡し、倉田忠雄と云へば東京での荒れ者、巡查でも誰でも手を除し、どうする事も出来ない悪青年となりました、忠雄は母の在命中は感心な子供と云はれ、母は末頼もしく思ひ、非常に喜んで居たのにも係らず、まだ母が死んでから三年も経つか経たないのに、よくも變れば變るものであります、嗚呼悪の感化力は實に強いです、實に恐ろしいです、父は遂に止むなく忠雄を勘當し母の石碑より忠雄の名を取り消しました。

忠雄は住み馴れた、懐い住家より追ひ出され、哀にも身を宿すに處なく、親類に行つても、誰一人かまづてくれるものはなく、又相談する確實な朋友とは一人もなく、唯白袴隊の名義の下に東京の生くら書生が衆合て豚のやうに汚ない所に住んで居る寄宿所がありますから、止むを得ずそこに自分の身を

宿すことに致し、ごろつきの様に、毎日々々博奕を打つたり、少年に暴行をしたり、弱い者と見たら難題を吹きかけ、結局には金を揺つたり、壯士にたのまれて僅かの金を貰つて亂暴をしたりして、悪い事を仕事に日を送つて居りました、忠雄は十月中旬頃、日の暮れ方、四谷見附を通ると、四五人の女の外國人と、三四人の美しい十八九のお嬢さん達が、堀の傍で優しい聲を出して、オルガンに合して歌をうつて、居るのを見て、突如立ち寄つて其歌を聴て居りますと、其歌は死んだ母がいつも自分を寝かす時に歌つてくれた歌でありました、鬼の様な忠雄の心も、子供の時を思い出して、死んだ母の聲を聞くやうで、非常な感に打たれて、今夜始めて少しは自分の悪事を悟るやうになりました、然し寄宿所に歸つて見れば見る事も聞く事も悪事許りで、少しく悟り始めたのに、亦元の通りとなり、歌の事も母の事も忘れてしまひました、一度悪に染みた青年が、善い青年になるのはなか／＼難事で、人間の方ではとてもどうする事も

出来ません、十二月の寒い夜銀座通を通りかゝりますと、九つか十位の可愛い子が、太鼓をたゞき、大擧傳道と書いてある灯笼をさげながら可愛らしい天の使のやうな聲で歌をうたつて歩いて居りましたから、立ち止まつて其歌を聞いて見ますと、此歌も亦二ヶ月前四ツ谷見附で聴いた歌と同じ歌でありましたから、又々昔の事を思い出して、死んだ母を思ふ心が一杯になり、胸も張り裂ける許りとなり、始めて目から後悔の涙を流しました、二三日の後も自分の仲間の者が死にましたから、青山の墓處まで見送つてやつた序に母の墓處に行つて見ますと、忠雄の母と石碑に彫りつけてあつた忠雄と云ふ文字は、哀れにも漆灰をつけて消してあるのを見て、忠雄も之に益々己の悪事を悟り、神の救を祈り、善人に立ち歸り、消された自分の名を元の通りになし、再び死んだ母の善き子供になるの決心を致しました、然し悪黨の仲間から離れて、今迄染み込んだ悪い心を洗ひ清めるのは、中々通常一様な事ではできませんから、忠雄も今日とい

ふ今日は、非常な大決心をした様子で、母の墓の前に跪き、涙を流しながら手を合せて、

忠雄「お母さん、どうも済みません、お母さんがお死になつた間もなく、私は悪い友達に勧められて、一杯の酒を飲んだのが手始めとなり、だんぐと深入りして、結局は放蕩無頼やくざ者となり、悪の上にも悪を重ね、悪事といふ悪事を皆なし盡くして、お母さんの顔に泥をぬつた不幸者の忠雄であります、私が小さな時に歌つて下さつた歌を聴いて、始めてお母さんの事を思ひ出し、善道に立ち歸る決心をいたしました、これからはどうしても善い者になりますからどうか、今までの罪を赦して下さい、お父さんから勘當は許され、誰が見ても善い者になつたと云はれる時は、必ず再び参つて忠雄の母となつていただきます。」

と懺悔もし又お詫も致しました。

母は嘸かし墓處の下で自分の子供の悔ひ改めの涙をみて非常に喜んだのでありませう、忠雄は今迄とは違い、品行を變へ、打つてかわつて善い青年となり、再び中學に入つて今までの汚名を取り消し、親の勘當も許されて再びなつかしい家に歸り、日々弟の由太郎と妹のおちかとしよに親に孝をつくし、誰が見ても確かな善い生れ變つた青年となりました、親の身に取つては放蕩息子が己の罪を悔いで家に歸つてくる程嬉しい事はありません、忠雄は十月十八日母の三週期の記念日に、懷に鑿と金槌を入れて青山の墓地をさして参りました時は、日は早や西に傾き、秋風は寒く、月は黒雲に掩はれ、時々顔を出す許りで、何となく寥しく、遠くにきこゆるは芝山内の鐘の音ばかりでありました、忠雄は母の墓處の前にひざまづき、

忠雄「どうかお母さん此忠雄をもう一度あなたの子供にして下さい願ひます。」と云ひつゝ、金槌と鑿とを以て漆灰で堅く埋めてある忠雄といふ文字より漆灰を

たゞき落し元の忠雄といふ文字を彫り顯しました。

第五十 顔 自 慢

平田おさみと申す娘は新華族のお嬢さんですが、非常な顔自慢で家に居つても鏡臺の前を離るゝ間がなく、顔を寫して見れば世の中に自分程美しい顔の女は決してあるまいと思つておいでになりました、それ程ですから學校へ参りましても道を歩いても、大層お顔が自慢でいやに、顔を動かしてこれ見よがしの振舞です、學校の友人はおみきが参りますとそら、顔自慢が來たと云うてクス／＼笑ひますけれども、おみきは何を友人が自分の顔を見て笑ふのか更に了解になりませんでした。

成程おさみは色は白く丸顔で鼻筋が通つて口元もしまり目もバツチリとして涼しそうで其上髪も濃い方ですから、一般の人に比べれば、先づ美人とも云はるゝ女ですが、悲い事に、此おさみちゃんには品格が備て居りません、顔に品位がありません、又愛嬌もありません、顔だちの美しいのが、必ずしも美人と申す事は出来ません、俗に痘斑も笑靨と云ひますが、見悪いと云はるゝ顔に却て美しい處があります、美貌と申しましても恰ど油畫の如き者で、繪具は立派に備はつて居て、青もあり白もあり紫も赤もありまして美麗は美麗ですが、肝心の太陽の光線がなくては生命もなく品位もなく品格もありません、其通人の顔でも色白で髪が濃くお鼻も小高く口元切て目もとばつちりと云ふばかりでは美人と申されません、其顔に光がなければなりません、眞の美人と云ふ顔には愛とか、忍耐とか、平和とか、満足とか、謙遜とか、剛毅とか、喜樂とか、種々美しい性質が現はれて居ります、おみきの顔にはこれらの美しい性質が藥にしかくとも少しもありません、其におみきは短氣で何か少し自分の氣に入らん事があるると直に顔に青筋立て、鬼の様な顔になります、つい二三日前にお元と申

す娘と手毬のつきあいを致しまして何か争論を始めましたが、おみきは口を尖らして閻魔さんに鹽漬魚を食へさせた様な、こわい顔をして

みき「なんだお元ちゃん、お前は新平民で元穢多の娘だよ、今でこそ私の様な華族と一緒に學校に來て手毬をついて遊べるけれども、昔は畜生ではないか、少し自分を考へておひかないさいよ、それにお前の顔と來たら、梅乾をつぶした様な顔でおまけに色は黒い取り處がありはしなわー。」

と、華族と云ふ位と自分の美しい顔をたてにして思ふ存分惡口を云ひました、成る程お元と申すは新平民には相違ありません、それに顔も十人並と云ふ程でもありませんけれども、何處かに奥ゆかしい處があり、何となくおだやかな上品の風があります、それに靜かな性ですから、普通の娘ならば笑ながら「私が新平民ならばあなたも新華族でありませんか、あなたも華族の中で私が新平民扱さるゝ様に取扱はれて居るのでせう、其にあなたは顔自慢で自分より美しい

娘は世の中にないと思つておいでせうが、まあ貴女の怒た顔を見て御覽なさい鬼でも裸足で逃げ出しすよと云ふておみきを嘲弄す處ですが、お元は感心です。決しておみきと言ひ争ひは致しません、恥かしめられた復讐もせず、

元「おみきさん許して頂戴、私が悪るかつたのです。」

と申しました時のお元の顔は天のお使の様に非常な光が顯はれました。傍に居つた十四五人の女達は、顔自慢のおみきの顔と、今迄見悪い顔だと思ふて居りましたお元の顔とを見比べて、始めておみきの顔が見悪くお元の方が美はしいと云ふ事を悟りました。

學校の歸途にお竹と云ふ娘が、お元に向ひ

竹「お元ちゃん、なぜあの惡らしい何時でも華族くゝと鼻にかけて居るおみきちゃんに謝罪なの、どし／＼やりこめてやればよかつたではありませんか、それに顔自慢だが、どうも私には美しい處がわかりませんよ、何とか

してあの怒つた時の顔が見せてやりたいわ。」

元「おみさちやんは自分免許の顔自慢で自分程美麗な女はないと思つて居なさるから、あの通りいばつて居るのですよ、出来る事ならあのおみさちやんを善良心にしてあげたいね。」

と云ひますと、お由と云ふ娘は

由「お元ちゃん一寸耳をおかし。」

と云ふて何か耳に囁きますと、お元は聞く度毎にニコ〜と笑ひウン〜と答へ何かお由はお元に面白い事を語した様でありましたが、側に居つた十人ばかりの娘は羨やましそりに、何に〜と問ひかけましたけれども「よい事よ」と云ふたさう何にも聞かせませんけれども、餘り皆が「お話よ〜」と申しますから、お元はお峯と云ふ娘に耳を口をつけて、人に聞こへない様に話しますと、お峯も笑ひながら「ウン〜」と申しますから、側に居つた娘達は尙更聞き度

なつてたまりません。

甲「私にも話して頂戴。」

乙「私にもよ。」

丙「ほんとにさ……てばさ……この通りお願いよ……よーよ。」

とお梅もお糸もお静も口々にせめ立て、聞きたがりますから、お元とお峯とお由の三人は、十人の娘の耳づたへに人に知れない様に話すと、皆なツン〜とニコ〜笑ひながら答へて居ります、此様子では何か大變な面白事がありそうです、次の日學校で此娘達は昨日何か相談が纏たものと見へ、遊ぶにも十人づれ一人もはなれませんが、此十人には何か隠れた謀略があるのでせうが、固く約束した者と見へ誰一人外に知る者はありません。それに奇妙な事には十人の娘の懐中には何にか入れてある者と見え、大變にふくれて居ります、外の大勢の娘たちは此十人の振舞を變に思つて居りました。かれこれして居ります

うち向ふから例の顔自慢のおみきがやつて來ます、十人の娘はそろいもそろつて面白そうに遊んで居りました、皆が懷中をふくらして居るのをおみきが認めて、お元に向ひ、

みき「お元ちゃんふところが大變ふくれています、何に、一寸、見せなさい。」

元「私の懷中にある者は昨夜神様から頂戴した人相見の鏡であります、誰でも此鏡で顔を見ると自分の心が悪いいかよいか知れます。」

と申しますと、おみきは何か自分の事を嘲弄すかと悪く取つた者ですから、疝癢がもちあがり例の通怒り始めました。

みき「お元ちゃん餘り人を馬鹿にしなさんなよ、人の心が見える鏡が何處の國にありませんか、鏡は人の姿や顔は見えますが心は見せる事は出来ません、何か石か瓦でも懷中に入れて人と喧嘩するつりなせう、さあお見せ見せ〜。」

と恐しい〜睜視る様な顔をして見つめますから、お元は今だと思ひお由にくばせをいたしますと、お由は懷中から一つの鏡をとり出しておみきの顔を寫して見せます、十人の娘は一時に約束通懷中から鏡を出しましておみきに見せましたから、おみきはどちら向いても鏡ばかり、十の鏡に寫つた自分の顔を見ますと、家で見て居つた顔とは大違、青筋がたつてこわい恐しい顔であります。大勢の中でこんな恥かしめを受けて日頃の元氣で一層怒りそうな者ですがなか〜自分で自分の恐ろしい顔を見て、大聲あげてワ〜と泣き始めました、お元はおみきに向ひ靜かに、

元「おみきちゃん私等が鏡を持つて來たのは、決して貴女を悪くしたのでありません、多分貴女は御自分の怒り時のお顔を御存じでありますまいから、鏡で見せてあげたら顔自慢もやむである、又美しいと云ふのは顔でなく心にあると云ふ事を知らして、貴女を善い人にしてあげたいと思ひま

して、昨日學校から歸途十人して相談してやつた事であります。』
と言ひさかせました、この時おみきは始めて恐ろしい顔を見てひどく、い
い娘となりました。

第五十一 松の木の音楽

『やう誠ちゃん。』

とらうて不意に背を拍くものがありますから、誠一は誰かと思つて、振向いて
見ますと、自分の友達の松藏であります、

誠『松ちゃん、何時君は歸つて來たの。』

松『僕は今し方上野の停車場へ着いたばかりで、歸りたてのほや／＼なの
や。』

誠『松島見物は面白かつたらう、松の木が澤山あつたらう。』

松『あつたとも／＼其は／＼澤山あつたよ、松島といふ名だけあつて、松の
木の生へて居る島は、千も二千もあつた、それ故海は一面に松の木の様に
見えたよ、松の木といふ木は實に男らしい木だ、獨逸では松の木は聖
き木だといつて、非常に尊まれて居るさうだ、また印度語で松の木といふ
のは、「神の木」といふ意味ださうだ、僕は松の木には適當な名稱だと思ふ
よ、空高の聳えた松の木に、風が當つて音のする所などは、有名な音楽者
の奏する音楽の様に聞えるね、其の音を聞くと、まるで天から響いて來る
様な心持がして、神様と交通つて居る時の様な感覺があるよ、君は左様思
はないか。』

誠『君から左様言はれて見ると、御尤もだし、僕は日光の山に登つて、松の
木が、枝をニューと出して居るのを見た時、何だか人が面白さうに、躍踏
つて居る様な氣持がして、舞踏でも見て居る様に思はれますよ、君はさう

は思はないか。』

松 「君にはちつとは松の木を見る眼があるなあ。』

誠 「馬鹿をいへ、眼が無くて如何する。』

松 「だつて僕の友達は大抵松の木を見る目がないよ、松であらうが櫻であらうが楓であらうが、一向お構ひなしで、松の木は松の木としての特別な使命のあるといふ事は少しも知らない、ほんとに木に對しては盲目だよ。』

誠 「君から左様いはれて見ると、僕は盲目だといはれても致方がないな。』

松 「君も自然といふ書物を読んで、神の奇しき能を悟り給へ、實に愉快だよ、人格がなんとなく高尚になるね。』

誠 「僕は盲目といはれても仕方がないが、松の木が舞踏つて居るのだけは見えるよ。』

松 「僕も君の様に、松の木を見ると、舞踏つて居る様に思ふよ、松の木には

悲しいといふ様な、隠氣な性質はなくて、何時でも愉快さうに舞つて居るやうだ。其に就いて面白い話がある、昔、昔、大昔、印度の或る村に、十人の童が、毎日毎日の暮方に集まつて来て、一人の歌ひ手が麗はしい聲で、歌を唱ふと、九人の童が面白さうに、舞るのであつた、或日童等は、お父さんたちに願つて、宴會を開いてもらはうと思つたが、親達は子供に對しては少しの同情もなく、唱ふたり、舞踏つたりする事は、何の役にもならぬといふて、更に宴會を開いてくれなかつた、其處で童達はせん方なく御馳走なしで、歌つたり舞つたりして居た、處が歌は段々うまくなり、舞踏も段々上手になつて来た、すると奇態にも不意に、舞つて居た足が、宙にあがり、何となく飛ぶ様な氣持がして、段々と空へ登つて行つた、母達は此の有様を見て、大變に怒り、「飛んで他へ行くのではない、早く來い。』と大聲に叫んだが十人の童等は、なほなほ上にあがつて行つた、然

し其の童達は後で不意に地の上に落ちて、松の木になつてしまつた、といふ昔話があるが、松の木を見ると、幹が歌つて、枝が舞踏つて居る様に見える。」

誠「ウン、僕の目に松の木が舞踏つて居る様に見えるのも無理ではないね、僕も此から君の弟子になつて、松の木を研究しやう、君僕に教えてくれ給へ。」

松「なに僕は君の先生になるわけは無いが、僕の知つて居るだけは、君に教えてあげやう。」

誠「君、僕は松の木では、赤松に黒松の二つきりつで知らないが、まだ他にもあるかね。」

松「なに松の木の内には黒と赤の他に、まだ白もあれば青もあるよ、白松は重に米國の北の方と加拿陀とにあり、青松は米國の南の方にある、ジョジ

ヤといふ州に澤山生へて居る、松の木の色は黒、白、青、赤の四つだけけれども、松の種類といふたら百もあるよ。」

誠「松の木の材木になる他に、何か役にたつ事があるかね。」

松「君、松の木程役に達つた木は他にあるまいよ。」

誠「左様かねえ、では君がいふのを數へるから、其の役に達つ途を擧げてくれ給へ、三つか四つ位しかあるまら。」

松「なに、十位はあるよ、いゝか、第一には材木だ、然し唯だ材木といふたのでは解からない、松の木には柔かいのと、固いのと二種類あつて、家を造る事から、船を造るに到るまで、松を用ゐるよ、第二は誰でも知つて居る通り、松の木から炭を作る、外國では此の炭を藥劇に用ゐて居る、第三は松の木の脂からチャンを作るので藥用にしたりタニアと云ふものを造るアスハアルトといふ道を達するには、此のチャンから作つた、タニアが是非必

要だそうだ、第四は或る所では松葉を編んで、糸の代に用ゐて居る、第五は歐洲の或る地方の貧乏な百姓家では、松の木の根を燃して、ランプの代にして居るそうだ、第六は漁師は松の木の中にある皮から、強い綱を作つて居る、第七に北極に近い處では、此の松の木の皮を製してパンを作つて日々の糧として居るよ、第八に鐵の錆びない様にするには、此の松の木から作つた、パシニーといふものを鐵の上に塗るそうだ、第九に松の葉や、マツカサから立派な油がとれる、第十に亞米利加の印度人は此の松の木から砂糖を製する。』

誠「これは驚いた、なるほど君のいふ通り、一から十まで數へたよ、松には役に達たない所は一つもないなあ。』

松「誠にやん、まだあるよ。』

誠「なんだまだ此の他に。』

松「印度人はマツカサの柔かいのを取つて、なか／＼甘い菓子を作るよ、』

誠「聞けば聞く程驚くねえ、松ちゃん君はよい名を持つて居るなあ。』

松「僕の名か、此れは僕のお父さんは非常に松が好きで、人から松先生といはれて居つたので、僕の生れた時自分の好きな松に因むで松藏と命けたのだうんだ、僕も松という名のある上は、其の名に恥ぢない様に、世の人の爲になりたいと思ふて、一生懸命に勉強して居るよ。』

誠「僕は君から松の話聞いて、何となく高尚になり、又松の様に役に達つ様にならないではいけぬと、深く感じた。』

といひながら、二人で電車に乗つて、新橋の方へ歸つて参りました。

第五十二 美しい手の争

暖かな春の日何れも拾四五歳かと思はるお竹とお由とお定と云ふ娘が、三人

連で手辨當さげて野遊にまへりました、お竹は軍人の娘でなんでも敗ける事の嫌いな子でしたが、二人の娘より遅く歩く事も嫌ひで、足の傷むのも無頓着で馳け足の様にしどてんく歩るいて居りました、顔を見ても何處が忍耐強い處がわかります、お由と云ふ娘はたいした商人の兒で金錢にはなに不自由なく、一寸野遊に出るにも縮緬の衣服を着指にはダイヤモンド人の金指環をはめ、途をあるくにも之見よと云はぬばかりに自慢らしく歩るいて居ります、お定は前の二人の娘とはまるつきり違ひ、親は十五圓か二十圓しか取らない極く月給の少ない學校の先生の兒ですから、衣服と云ひなんと云い前の二人とは比べにもなりませんけれども、顔には何となくおくゆかしい處がありまして、言葉づかひや立居ふるまいがしとやかですから、誰が見ても性質のよい同情の厚い娘だと云ふ事がわかります。

三人の娘が目黒の停車場が汽車から下りて、不動山へ行く道へかゝりますと、

向ふから穢い衣服を着て白髪頭の八十位の老人が、腰に袋を下げて竹杖にすがつて足を引きずりながらやつて参りました。

三人の娘の傍まで近よりますと袋から何か書物を出して三人の娘に渡そうといたしました、お竹は鬼の様な顔をしお由は大きな角を出さんばかりに、

兩人「何んだ穢い物を。」

と突然すて、しまいました、けれどもお定は二人の兒をなだめながら、

定「お竹さん、お由さん、そんなさならなくとも何が書いてあるか讀で見たら

よいではありませんか。」

竹「だつて穢い乞食の手からもらつた物が讀める者ですか、第一外分がわるいもの、さあ〜早く行きませうよ。」

とせきたてますけれどもお定は

定「否え、そうではありません、此老人は何にか困る事があるから私共の助

を乞ふのでありませう、其譯が此紙の書いてあるのでせう。』

と云いつゝ二人の娘の捨てた紙を自ら拾ひあげて其文章をよみますと、此老人は四國の人で唯一人の息子が東京で大病の爲め死にかゝつて居ると云ふ知らせがありましたから、其子に遇ひたいばかりに、親族や知友からもらいあつめて、二十五圓の旅費を用意して出だしましたが、大坂まで參る汽車の中ですりの爲めに残らず取られて一錢もなしになりましたけれども、息子に遇いたい一念で乞食しながら漸く東京の近邊まで來ましたが、二三日食物も食はず非常に困て居るから、少々でも助けてくれと云ふ事が書いてあります。

定『これ御覽なさい此老人は大變氣の毒の人ではありませんか、お竹ちゃんお由ちゃん何にか助けてやりませう。』

竹『何んにも私はやる者は持て居りませんよ。』

と荒々敷言ひ捨て、一錢でもやる様子はありませんから、

定『お由ちゃんお金を澤山おやりなさい此老人が悦びますよ。』
と勧めますと金の指環のはまつてる手を見せがら、

由『私は金の指環を買ふお錢はあるが、こんな乞食にやるお錢なんか有やしませんよ。』

之も一言の下にはねつけましたから定も大に弱りました、自分は人にやるお錢は持ちません、十錢ばかりはありますけれども、歸途に汽車に乗るには是非此お錢が入用です、それにお茶店に休んでお茶を呑めば一錢や二錢は置かればなりません、さあ、困りました此老人を助けたいがお錢がなし、此錢をやれば獨で歸られず、暫く何か考へて居りましたが自分の手にさげて居る風呂敷包をあけて、竹皮の中から握飯二ツ取り出し、

定『これは私がお辨當に以て來た握飯であります、金があればあげますが十錢きりありません、それをあげれば家に歸る事が出来ません、併し此握飯

二ツあげたからと云ふて、別に私が飢餓で死ぬと云ふわけもありませんからこの二ツの握飯を食べてください、私はお腹が飢ても貴君を助けになれば満足であります、是は私のあげる物ではありません、神様の賜物であります。

とて二ツの握飯を渡しますと、老母は熱い涙を流しながら何度となくおし戴き、老「難有御座ります、これで生命を拾ひました、御恩は決して忘れません。」と申しましたときは此老人の貌が變りまして、其顔は神の使の様に輝きました。三人の娘は此老人を後にして目黒不動を指して参りました、路すがらお竹とお由はお定を大變にひやかし、

竹「あなたつまらないではありませんか是から家へ歸るまでにはお腹が飢るでせう、人を悦ばしても自分かお腹が飢ては實につまらないではありませんか、ねえお由さん。」

由「そうですとも、私は一錢でも人にやるのは厭やですよ、人に與るくらいなら自分で何か買つて食べますわ。」

二人の娘はどこまでも同情のない貪慾な子でありました、お定は人にこそ言はねど心の中には、若しや真に困て居る人を助ける事が出来れば何よりの幸である、人を助けるのが最上の悦びだとして居りました、三人の娘は不動様の入口で辨當を食べてしましますと茶屋から出て三人連で山へ入て行きました、春のことです山の中はどちらを見ても赤や紫や黄色の草花が爛熳と咲き亂れて、のどやかな風につれて黄色い蝶や白い蝶々が楽しそうにまつて居ます、太陽の光は暖かで、まあ何とも云えない善い心地で麗い眺めでありました、三人の娘は夢中になつて彼地へかけ此地へはせて色々の花をつみあつめ手に一杯取つて赤や紫の色を手にすりつけて、

由「これ御覽此通り赤い色は大變美さむ。」

すると負け嫌のお竹さんは

竹「何に赤よりもこの紫の方が麗よ。」

お由もなか／＼敗ん氣の娘ですから、

由「何に私の手を御覧なさい、大層赤いでせう何とみごとではありません

か。」

と互に競ふて、とう／＼二人で美手の争を始めました、お定はわきに居り誠に困り色々二人をなだめますけれども、二人とも強状な敗ぬ氣の娘どもですから中々言ひ争をよす處ではありませんだんだん、火の手が強くなり容易ならぬさわぎとなり、遂には大聲あげて喧嘩となりました、すると奇妙な事には向ふから先に乞食の老人がやつて來ました、併しお竹も前の老人とは思いつかぬ程容貌は變つて居りました、お由も前の老人とは思はず、

由「お竹ちゃんそれでは向ふから來る人に頼んで、あなたの手が麗か私の手

が美しいか裁判してもらいませう。」

と言いますとお定は、

定「そんなら何でもおなぐさみ、私も美手の競争の中間入しませう。」

とは言ひましたでしたが手には赤も紫も何の色もつけませんでした、偕て件の老人が近づきますといきなり赤と紫、白との三ツの手を並べて差出し、どちらが一番うつくしいか裁判を願ひました、忽論お定の手は赤も紫もついて居りませんから競争にかたるゝはづはありません、必ず赤か紫の二ツの内に一番奇麗の者があるに相違ありませんのでした、然るに老人は三人の手を熱々ながめお定の手をつかまへて、この手が一番奇麗だと申しました、お竹お由は驚いたも驚かないも非常に驚きました、お竹は自分が勝と思ひ、お由も自分が必ず勝つと思ふて居りましたのに、二人は落第してお定が一番奇麗と云ふ事になりました、

だから、二人は不思議さうに其理由を問ひました、老人は輝いた神の使の様な

顔でニコ／＼笑ながら、

老「奇麗と云ふのは赤とか紫とか云ふ色に限りません、お定の手は何色もついて居りません、通例の人から見たらお定の手が一番悪い手でありませ、然し奇麗と云ふのは赤や白にあるのでなく、このお定の手は飢んとする人を助けた手であるから、三ツの内一番うつくしい手である。』

と云ふたきり其老人の姿が見えなくなりました、三人の娘は非常に不思議に思ひました、お竹お由はこの答を聞き大に悟る處がありました、自分達はこれまで身には立派な縮緬の衣服をつけ金の環指でもはめてさい居れば、心は何あつても人から立派な娘だと思はれると思ふて居りましたが、今此老人の言葉により立派な奇麗と云ふ事は、衣服や金の指環でなくて心の純潔、慾心のない、高尚の一番立派な奇麗な娘だと云ふ事をさとりました。これより二人の娘はお定の様に立派な奇麗な娘となりました。

第五十三 雪きらひ小僧

子供といふものは犬の様に雪が降ると大層嬉しがるものでありますのに、夏吉といふ小供は暖かな名を持つて居るに似合はず、非常に雪きらいの小供でありました。

夏「お母さんごらんなさい、また白いものが降つて来ましたよ、もう僕は雪にはあきました、年に一度や二度位は銀の様な世界を見るのも楽しみですが、今年のように八度も九度も降つては嫌になります、もう實に雪はいやです、雪のやうなものは無用と思ひます、神様はあんなものをお作りなされるのはお止めなされたらよいでせう、僕でさへ寒くて／＼耐らないのですからさぞ麥や野菜などは雪が降ると振えあがるでありますせう。』

と子供にも似相はない言葉を申しましたから、母は

母「お前はそんな事をいふてはいけませんよ、お前には雪は寒いでせう、けれども麥や野菜には暖かい蒲團ですよ。」

夏吉「おつ母さん、雪が蒲團ですつて？へー！僕にはさつぱりわかりません、驚きましたなあ。」

と目を丸くして驚きました

母「お前は寒暖計といふものを知つて居るかへ。」

夏吉「寒暖計……寒暖計……そう、寒いかな暖かいかを計る器械でせう、學校の教室に懸けてあります、昨日先生は其の寒暖計を見て、小使に、此の様に教室を熱くしておいては小供の爲になりません、五十度か五十五度にしてお居ればよいのです、六十五度では熱過ぎますと云ふて窓をお開けになりました。」

母「先生にお願ひ申して其の寒暖計をちよつとお借り申しておいで。」

と曰はれて寒暖計が雪のお話に何の關係があるかは解りませんが、おつ母さんが借ておいでとおしやりましたから、一言の返答もせず、又理屈も曰はず「ハイ」と曰ふて學校に行き先生から寒暖計を借てまゐりました、母は其の寒暖計を持つて、夏吉をつれて畑の中にまゐりまして、雪の上に寒暖計を置き、

母「夏吉や、どの位寒いか解りますか。」

夏吉「は〜。」

母「はい〜では解りませんが、何度になつて居りますか。」

夏吉は指の先で一度二度を計ながら

夏吉「あゝ零點より五度下つて居ります、僕は雪は大嫌ひです、寒くつて寒くつてたまりませんもの、これでは麥や野菜なんかは凍え死んでしまふに定つて居ます。」

と申しました、すると母は其寒暖計を取つて雪の中に入れ、暫らく経つてから

それを取り出して

母「夏や何度位になて居るか、見て御覽、夏吉は「ハイ」と答へて寒暖計を見ましたたが非常に驚ろいて。」

夏「ヤ、ヤ、ヤ、雪の上で零點以下五度であつたのに、雪の中では却て零點以上二十五度です、不思議です子。」

母「夏や、雪は麥や野菜の蒲團だといふ事が分りましたか、お前は何でもかでも雪は寒くて、嫌だ〜といつて、風の子の筈の子供に癖に家に許り引つ籠んで居ますが、その雪は却つて蒲團にもなる位の物なんです、神様は寒い冬の日には雪を降らせて麥や野菜などを温たかにお守りになるのです、世の中には自分の嫌だと思ふ事も、外の物の爲には非常に有益事が多う御座います、神様は凡て人の爲によい様になすつて下さるのですから、自分に取つて嫌だと思ふ事でも、決して愚痴をこぼしてはいけません、

世の中はお前一人の爲ではありません、あの通り雪が白くみへるのは雪と雪との間には空間があつて、其の間に光が入るからそれで白く見えるのであります、雪程白いものはありません、また雪程美つくしいものはありません、お前のやうな愚痴ばい自分の事をばかり思ふて人の事を思はないものゝ心は、雪の様に白くもなく、また雪の様に美しくもありません、あの子供の心は雪の様に白くて美しくいと賞められる様にならなくてはいけません、然し私がいくら良い話をしてあげても、汚れた心は雪の様に白くなりません、唯だ子供の汚れた心を雪の様に白して下さるのはイエヌ様の御力であります。」

夏吉は先程よりお母様の雪の話を書いて非常に感服し、

夏「お母様、決して僕の心は雪のやうに白くはありません、確かに黒くあります、私は今が今まで自分さえ甘いものを喰べ自分さえ美しい衣服を着て

暖かであれば人はどうでもよいと思ふて居りました、其上自分の嫌ひなものは何の益にも達ないと思ふて居りました、あ、私が悪くありません、今日から雪の様に白い心の小供となりたいたいものです、お母様雪よりも白いものがありはしませんか、私は雪どころではなく、雪の十倍も二十倍も白いものになりたいたいのです。』

としきりに雪よりも白いものを求めますから、母は一冊の書物を開き、

母「夏吉や雪よりも白くなる事が出来ませぬ此の歌を唱ふて御覽。』

と母と子供とは一緒に聲を合せて、

エスよ心にやどりて

われをみやとなしたまへ

けがれにそみし此の身を

雪よりも白くせよな

わかつみをあらひて

ゆきよりも白くせよな

二人の清い歌の聲は遠く／＼この眞白の雪の世界に響き渡りました、夏吉は喜にたえない様な顔をして、

夏「お母様、僕はこの歌を歌つたら急に心がさつぱりした様な氣持になりました、僕は最早決して雪を嫌ひませぬ。』

と申しました時に、後ろの方で、

『夏ちゃん、雪達磨をこさへて遊ばないか。』

と三四人の小供が呼びました、夏吉はもう全く心が變つてしまいましたからすぐ

夏「今すぐ行くよ。』

と答へて走り行きました。

母はこの有様を見て莞爾いたしました。

第五十四 眞の忠君

信州の山奥に中村と云ふ小な村がありますが、小供の教育にたいそう骨を折る人が澤山あると見え、村にも似合はぬ立派な小學校があります、先生も良人ばかりそろつて居りましたので、誰云ふとなく此村を教育村と云うて居りました、誠に結構な名であります、大概他人に呼名を付ける時は悪い名を付ける者です、例へば、仕様のない子供を「オチャツピー」と云ひ馬鹿な小供を「テンポーセン」と呼び、氣のきかない小供を「七月フヤリ」と申します、こんな名を付けられたら誰も厭なものです、「神童」とか「天童」とか言はれたら皆よい心地がするでせう、中村に住んでる小供たちが、教育村と云ふのを聞いて嘸々喜んだでせう、此小學校には特別にお金をかけて作つた部屋が一ツありました。

が、この部屋には 天皇陛下の御寫眞が立派な額にかざられて置かれてあります、學校の始まる前には一人づゝ生徒が御寫眞の前でお辭儀を爲て禮拜をするのであります、教育と云ふ者は誠に恐ろしい者で、毎日々々小供がお寫眞を拜む者ですから、小供の心には 天皇陛下のお寫眞を恐多い事ですが、お寺に安置してある佛様と同様に思込み、餅をあげたりお花を飾たりする小供もありました、恐多くも教育の誤から遂取返のつかない思想を小供の心に吹込み、御寫眞を偶像の様に思はしめました。

此小學校に忠吉と云ふ十三歳になる小供と清太郎と呼ぶ十二歳の小供が居りましたが、此二人は大變仲のよい小供で遊ぶ時でも勉強する時でも、何時でも一緒に居りました、忠吉は何をしても極忠實で表面だけまにあわす様な事は決して致しません、清太郎は極正直で決して虚を言うたためしはなく、朋友に親切で組では何時も一番でありました、學校の小供は誰一人清太郎を偉人だと言

はぬ者はありません、先生もこの清太郎の行に感服しどうかして、自分の家に置き、自教育たら後々は偉人になるであらふと思ひまして清太郎の親に相談をしました處が早速承知を致しました、そこで學校のついで隣に自分が借りて居る百姓屋の二階の間で清太郎と二人で暮し、大切に教育て居りました、或日の事學校で清太郎が忠吉に向ひ、

清「ツイ忠ちやん、明日はお休で先生は今夜上田までお父さんに遇においでなさるので僕一人ざりになるから、君にあそびにこないかそして泊り給へ、君と一緒に幼年教育四巻の八と思うたが「子供の勳章授與式」と云ふのを讀もうぢやないかおもしろいよ。」

忠「君も幼年教育を讀んで居るか。」

清「僕は幼年教育は讀まぬ本はない「新聞賣子」から「親の命令」まで五十冊も讀んだよ。」

忠「そうか僕は 犬の博覽會」と「マッチ賣子」とを讀んだばかりだ、實に小供にはためになる本だな。」

清「君きつと來給へね、よいか、來る時は書生の羊かんとこんべとうとをもつて來たまへ、待つて居るよ、父さんに宿ると云うて來たまへ、キットだよ。」

と云うて二人はニコ／＼笑顔をして家へ歸つて行きました。その夜の八時頃月もなく真闇なのに忠吉は唯獨で約束の通り豆と焼芋を風呂敷で包んで手にさげ、さよいすきとうつた聲で

『みめぐみあるひかり、かこめるくらきなかにも、われをみらびけ、夜は暗く家は遠し、われをみらびきたまへ』

と歌いながら學校の近所へ参りますと不意にパチ／＼と云ふ音を聞きませした、忠吉は驚いて何處から音が聞こえるのかと思つて、小學校の横へ入つて

見ると清太郎の住んで居る百姓屋の物置からもうくと、黒煙が上りまして見
 てる間に學校と清太郎の居る家に火がうつりました、忠吉はあらん限の聲で火
 事だくと叫びましたけれども、近所には家がありませんから忠吉の聲を聴い
 てかけつける者はありません、其内に火の手は中々盛んで學校からも清太郎の
 家からも凄惨な煙を吐き出しました、忠吉が急いで學校に行つて 天皇陛下の御
 寫眞を救い出そうと致しました時、清太郎は二階から悲しい聲を出して、助けて
 くれくれとさげびました、其凄惨な聲が忠吉の耳に聴へましたので、まことに
 忠吉は艱難場合になりました 天皇陛下の御寫眞を助け様と思へば、清太郎を
 焼殺さねばならず、又清太郎を助け様とすれば御寫眞を焼かねばなりません、
 進退こゝにきわまるとは此様な時でありませう、忠吉は暫らくかながへて居り
 ましたが大決心をした様子で、急いで梯をかけて煙に巻かれて死なんとする清
 太郎を漸の事で救下ろしました、村の者が火事だくと云うて多勢集つて來

ました時分には、小學校は半分も焼け落ちてしまつて、恐多い事ですが御寫眞
 は灰となつてしまいました、火事が済んで御寫眞のなくなった事が分りますと、
 村中の者が皆青くなつて、村長は縣廳へ進退伺を出し、先生方はすぐ辭職を
 致しました、忠吉は不忠者の名をこうむり、人は皆忠吉が清太郎を救ふてお寫
 眞を出さなかつた罪をせめました、併し忠吉は口に出してかれこれ言い争を
 致しませんが、心の内では清太郎が生きて居れば偉者になる小供だから後々は
 國の柱とも爲て 天皇陛下のお爲めに命をも捨てる人間である、恐多い事なが
 らお寫眞は焼けても何枚でも寫す事が出来る者である、其何枚でも出来る者を
 再び作る事の出来ない國の爲になる偉人の生命とは變る事が出来ない清太郎を
 救ふてお寫眞を焼たのは眞の忠義である、自分は決して 陛下をないがしろに
 した者ではない、二人とない正直な學才ある清太郎を救ふたのは眞の忠義であ
 る、誰が何んと言ふても決してかまはぬと、心の内でかたく信じて居りました、

忠吉は中々えらい小供であります、人の云ふ事を氣にかけずに居りましたが、自分が世間から不忠者〜と言はれるので唯兩親に對して氣の毒だと思ふて居りました。

或日のこと縣廳から村長を呼に來て、決して村長は辭職するに及ばず、先生も元通り學校で勤むる様にとお達が宮内省からあつた由を申し聞かせました、村長は頭を何度も下げて、天皇陛下の廣い御徳に感じ入りました又不忠〜と呼ばれた忠吉へは清太郎を助けた御褒賞に 陛下より銀時計一ツを賜はり、その上忠義の奴だとの有難い御言葉を受けました、忠吉の名譽は非常な者です、兩親も忠吉の爲めに深く喜びました。忠吉は目をこすりながら嗚呼今のは夢であつたかと申しました。

この一事から眞の忠君と言ふ者は外部ばかりでなくて、心から君を愛する者でなくてはならぬと言ふ事がわかりました。

第五十五 めくらのカナリヤ

お鶴と云ふ娘は年に似合はぬ我儘な強情の娘でありましたが、然し唯た一つお鶴に取つて取處のあるのは、仲々強情であるだけに、非常は辛棒強い事でした。

或る日、お鶴はおつ母さんから一羽の美しいカナリヤを買つて貰ひました、此のカナリヤと云ふ鳥は美しい許でなく、大變好い聲を持つてる鳥で、よく骨を折つて仕込みさへすれば、如何な歌でも歌ふ事が出来ます。

お鶴は後生大事に此の鳥を籠の中に入れてやり、毎日毎水を飲ましたり、食物をやつたり、又行水を使はしなどして大切に致して居りました、若し妹のお竹が籠の側へでも來ますと、恐い顔をして追やり、少しカナリヤを見せません、此のお竹と云ふのは今年八歳になる娘であります、不幸にも生れて

程なく足を痛め、跛をひき乍ら歩くと云ふ様な可憐な娘でありました、此様な不具な妹でありますから姉のお鶴はそれこそ大事にして可愛がつてやらねばならぬのですが、我儘な性質は仕方がない者で、何一つとして情をかけていたはつてやる事はありません。

顔は心の窓だと申しますが、なる程此のお鶴の顔を見ますと、女らしい優しく崇高い處は薬にしたくも無く、何時も青筋をたて口を尖らし、眞實に額に角でも生はへてたら鬼とでも見える位です、誰でもお鶴を一目見て、あの娘はいちの悪い我儘な兒だと申します。

然しお鶴は感心な事には、如何かして此のカナリヤに「君が代」の歌を教へ様と、毎日毎日熱心にカナリヤの入つてる籠の前に坐り、「君が代」の歌を聞かせます、然し仲々思ふ様には参りません、するとお鶴は例の青筋を立て、恐い顔をしてカナリヤを叱け付けます、終には側に聞き兼ねて優しく止める妹の

お竹にまで悪口を聞きます。

いくらカナリヤが如何な歌でも歌へると云つても、人間でも二日や三日かゝらねば覚えられぬ「君が代」を一週間や二週間で覚えさせ様とするのは、少し無理です、お鶴は如何かしてカナリヤに「君が代」を教へ様と思つて、一日でもカナリヤの籠の前で「君が代」を歌ふ事を缺かした事はありませんでした。或る日田舎から親類の人が参りまして此の有様を見、お鶴に申しますには、「お鶴さん、カナリヤに何の歌でも教へ様と云ふのは、仲々な事です、僅か一ヶ月や二ヶ月で教へる事は出来ずまい、父さんや母さんが子供を教育すると同じてあります、子供をよい子供にするには、親は可憐だと思ひ乍らも叱つたり、又暗い押入の中に入れてたりして、何でも苦を経て後によい子供になるのです、私は前に一羽の鶯に一つの歌を教へるのに一年もかかつた事があります、然し教へる時には、明るい處で教へないで眞闇に

して教へるのです、だから何時でも籠の上に風呂敷か何かかけてするので
す。』

お鶴は此の言葉を聞いて非常に喜び、其れからはカナリヤを闇い押入の中に
籠に入れたまゝ置き、自分は押入れの外に立つて「君が代」を歌つてやりまし
た。

或る程カナリヤは今までよりは餘程早く覺へる様になり、又聲も大層よくな
りました。其後六ヶ月も立つか立たない内には、其れは其れは優しいよい聲で
「君が代」の節を歌ふ様になりました。

之を見てお鶴もあゝなる程教育と云ふ者は無づかしい者だ、親が悪い子供を
よくするには如何に困るか知れないと、少しは自分の身を顧り見て耻づる處が
ありました。

或る日の事です、近所のお婆さんが参りまして、

『お鶴さん、私の家のカナリヤが、如何した者か二三日前から病氣でしたが、
今朝から急にめくらになつてどこに、水が入つてるか、又所處に餌がある
のか少しも解らないので困つて居ります、何卒私のカナリヤをあなたのカ
ナリヤの側に置いてやつて呉れませんか。』

と申しました、いつもなら一言に嫌ですと云ふのですが、カナリヤの歌を教へ
てから幾分か自分の悪い性質を悟りましたから、嫌ながらも承知してお婆さん
のカナリヤを自分のカナリヤの側に置く事に致しました。

お鶴のカナリヤは大變親切な鳥でありましたから、盲目のカナリヤが來た日
から、少しもいぢ悪くする事なく、自分の口から盲目のカナリヤの口へ餌を入
れてやり、又は水を飲ましてやり、まるで自分の子供でも世話をする様で、誰
が見てもお鶴のカナリヤの親切に感心しない者はありませんでした。

お鶴は自分のカナリヤの親切なのを見るにつけ、今まで妹に非常に不親切

であつた事を悟り、始めてあゝ私は人間として生れ乍ら、同じ血を分けた、然かも生れつきの不具者の妹に、何に故あんな邪慳であつたらう、あゝ悪かつた。カナリヤですら盲目のカナリヤにはあの通り親切にするのに、今までの私の行爲を思へば思ふ程、胸がせまつて來る様だと、泣き乍ら直ぐに兩親の部屋に行き、今まで自分の悪かつた事を白狀して神の前に其の罪を悔い、側に居た妹を抱きしめ、眼から涙をポロポロと流しながら、

『お竹ちゃん。』

と云ふたきり何も云へなくなり、其處に泣き伏して終ひました、お竹は優しい聲で、

『姉さん、私は姉さんの今までの行爲を何とも思つて居りませんでした、姉さんに怒られた時も、いぢ悪くせられた時も、何卒姉さんが好い人になる様にと神様に祈つてたの、姉さん私はあなたを愛します。』

と小さな紅葉の様な手で、泣き伏して居るお鶴を抱き起こしました、でなつとお鶴の顔を見ますと、今までの顔とは違ひ、天使の様に光つて見えました。

『姉さん、お顔が變りました。』

と云はれてお鶴は部屋にかけてあつた姿見で自分の顔を見ますと、成程今までの邪慳、貪慾、我儘な顔は變つて、柔和、同情、喜の優しい顔となつて居りました。

皆さん、如何です、お白粉をつけたり、キレゝ水を塗つたりしたつて顔は決して美しくはなりません、顔は心の窓です、心が奇麗にならなければ顔はお白粉や何かで美しくなる者ではありません、昔ステパノと云ふ人が神様の道の爲めに石でうち殺された時、その顔が天の使の様だつたと云ひます、誰れでも天の使の様になりたいでせう、ですから心の清い美しい人におなりなさい、左様するとお鶴の様にあなた方が鏡に向ふ時、柔順い、可愛らしい、笑つて居る顔が

鏡に映りますよ。

第五十六 五拾錢銀貨

八十位かと思はれる腰の曲つた白髪頭の老婆さんが、大きな布呂敷包を手に下げ杖をついて、上野の停車場でまごごとして居ますと、十二三才になる子供が老婆さんにむかひ、

子「老婆さん何處へ行くの。」

老「私は今田舎から来たばかりで、東京は東西も解らず、また此の人の多いのには目が眩む様です、下谷練堀町へ行くには如何行きますか。」

子「あゝ下谷練堀町ならば此處からあまり遠くはありません、二錢くれるならば僕が其荷物を持って練堀町まで送つてあげやう、僕の母さんは病氣で薬を飲む事が出来ないのだから、僕は毎日此處へ来て人の荷物を運搬して一

日に二三十錢は働いて母さんの藥代にして居ますが、病氣がはか／＼しく癒らないには困ります。」

老「私も今日娘の急病と謂ふ電報を受取て、狼狽して出て来たので、娘もさぞ困つて居るだらうから荷物を持って貰うよりは、其の二錢でも餘計に娘の處へ持つて行つてやりたいのですが、何分にも是の黒暗に八十にもなる私に此の重い荷物を下げて、知らない路に行く事は出来ません、此の田舎物の老婆に取つては二錢は大金ですが思ひ切つて出させう、何卒か荷物を持つて来て下さい。」

と涙を流しながら頼みました、子供は荷物を手に下げ、片手に老婆さんの手を引きながら、上野廣小路に出で左に曲つて老婆さんを娘の處へ連れて行きました。行つて見ると二間々口の汚い家で、病氣の娘がウン／＼と唸つて居るのが聞えました、老婆さんは此の唸聲を聞いて狼狽ながら、汚い賽布を開け二錢銅

貨を子供にやりました、子供は此を貰つて悦んで家に歸る途中、夜見世の光で
 其の二錢銅貨を見ますと、其は二錢銅貨ではなくて五十錢銀貨でありました、
 先きに老婆さんが二錢銅貨を子供に拂う時に、娘の苦しうな唸り聲を聞いた
 ので狼狽へて、二錢銅貨だと思ふて五十錢銀貨をやつたのでありました、此五
 十錢銀貨は此子供に取つては試験石でありました、子供の心の中に善と惡との戦
 がありました、此五十錢銀貨を老婆さんに返して來やうか、それとも止さうか、
 此五十錢があれば病氣の母さんに薬を買つてあげるのみならず、玉子の四ツや五
 ツ牛の乳の二合や三合は飲ましてあげる事が出来る、左様すれば病氣も直きに
 癒はる、然し若し此五十錢銀貨を返さなければ八十になる老婆さんは娘に薬を
 飲ましてやる事が出来ない、嗚呼此の小供の心、善が勝か悪が勝か暫の間途
 中で考へて居りましたが、例間違であるとも一旦呉れたからは老婆さんの間違
 である、又僕は何處の子供だか知るまいから尋ねに來る事はあるまい、此は天

の賜物である濟まないが貰つて置かうと自分勝手な理窟をつけてたう、此子
 供は惡の爲に破られてしまいました。

扱て老婆さんは可愛娘の家へ來て見ますれば娘の病氣は思ふたよりは重くて、
 その上夫は一寸した間違がもとで人と喧嘩をして大傷を負ひ、仕事にも出る事
 は出來ず、老婆さんが金を持って來るのを今か／＼と待つて居たのでありました、
 老婆さんは賽布に手を入れて二ツの五十錢銀貨を娘にやらうといたしました、
 するといま確にあつた五十錢銀貨が一ツよりありません、老婆さんは非常に驚
 きました、掏摸に取られる筈はない、あの通り確かに懐へ入て置いたのだも
 の、して見るとあの子供に二錢銅貨をやる處を間違へて五十錢銀貨をやつたに
 違いない、嗚呼とんでもない事をした、あの子供の家は何處かしら、探す事も
 出來ない、あゝ困つたと泣きますから、此を見て娘の病氣も一層重くなる様で
 ありました。

子供は家に歸つて五十錢銀貨を母に見せ

子「母さん此の五十錢銀貨で何を買て來ませう。」

といひますと母は子供に向ひ

母「いつも十一時か十二時まで働いても二十錢か三十錢よりかは取れないのに、今日は未だ九時にもならないのに如何して五十錢も働く事が出來ました、また常日二錢銅貨や十錢銀貨などがあるのに、今日は五十錢銀貨ばかりとは如何したのです。」

と問はれて子供は何も隠さず八十位の老婆さんが二錢くれる處を間違つて五十錢銀貨をくれた事を白狀致しました、母は此話を聞き涙を流しながら子供に向ひ、

母「私は病氣をしても不正な金で藥を飲むのは嫌です、さぞその老婆さんは此五十錢が無い爲めに、病氣の娘に藥を飲してやる事も出來なからう、お

前は何程親に孝を盡しても悪い事をしては決してそれが親孝行にはなりませんよ。親の貧乏を助ける爲めに娘が悪い處へ身を賣といふ事を昔から日本では親孝行だと思ふて居るが大變な誤謬であります、神様は正義の御方ですから決して左様な事をお喜になりません、人の誤つてくれたものは

お前のものではありません、其を自分のものだと思ふものは盗人です。」と云れて子供は母の熱心なる言葉に感激し、自分が全く悪かつた事を神様にも母さんにも説をして、早速夜の十二時頃下谷練堀町に参りました、子供は此の家と思ひ、トン／＼と雨戸を敲きました、家では娘と老人が五十錢銀貨のなくなつた爲めに、如何したらよいか相談して居る最中でありました、老婆さんは雨戸を開けて見ますと、先程の子供が立つて居りました

老「お前は何の用かい。」

子「はい五十錢銀貨を返しに來ました。」

と云ふて五十錢銀貨を老婆さんの手に渡しました、此時老婆さんは非常に驚きました、又非常に悦びました。

老「エ、それでは先刻間違つてやつた五十錢銀貨を返してくれるといふんだね。」

子「エ、そうです、お婆様ほんとに濟みません。僕はあの歸途に、夜店の燈火で二錢銅貨をもらへばい、所を五十錢銀貨をもらつて來た事を知りましたが、ツイ悪い心に敗かされて、そのまゝ、家に持つて歸りました、けれども共私のお母様は、僕の話をきいて、大層お怒りになつて、僕をお責めになつたので、僕は非常に悪い事をした事を悔い、すぐに返りに參つたのです。何卒お婆様、僕の悪かつた事を許して、此の錢を取つて下さう。」

老「あ、そうですか、私も此五十錢がなくなつて困つて居た所ですからこんな嬉しい事はありません、それではこれは私が頂いて、其代りこれを持

つて來て下さつた駄賃にお前様に五錢あげますから一寸待つて御出でなさい」

子「いゝえ、其んな物は貰ふ筈がありません。」

といつて子供はどん／＼かけて行きました、奥に寢て居た病人は其聲をきいて、自分の病氣の直つた様に喜びました、正直は親孝行ともなり、又病人をなほす薬ともなります。

第五十七 天使と惡魔の顔

立派な何處かの奥様が、車から下りて、可愛らしい十一二才の娘の手を引いて、上野の鷺坂の真中にまゐりますと、誰か後から「お春さん／＼」と呼ぶものがありますから、何氣なく振向いて見ると、十五年前に同じ學校で二年も同室であつた、久枝といふ學校のお友達でありました。

春「おやまあ久しぶりで久枝さん、其の後は御無沙汰いたしました。」

久「私も御無沙汰を致しました、實は學校を卒業すると間もなく、北海道へ參つて、先月初めて十五年ぶりで、東京へ歸つて來ましたんのですの。」

春「おやそうですか、まあ、可愛い御坊ちゃんですね、あなたの御子さんですか。」

春「はい、私も今あなたの御連になつて居らしやる可愛い娘さんはあなたの御娘さんかと、お聞き申さうかと思つて居りました所で、まあ可愛らしい御娘さんですねえ、母様に宛然で御座いますよ、御話致せば長くなりませんが實は此れは義理ある子なので御座います。」

久「左様で御座いますか今日は何處へお出かけですか。」

久「はい聞けば根岸に、横田という近頃巴里から御歸になつた、有名な畫工がおいでなさるさうですが、其人は大變に肖像畫が御上手だと聞きました。」

たから、北海道へ歸ります前に此の子供の肖像を畫いて戴き度いと思つて、今出かけて參つた處なのです。」

春「まあ、そうですか、私も此の娘の肖像を畫いてもらい度いと思つて、行く途中なのですの。」

久「其れは幸です、では御一緒に参りませう。」

と二人は可愛い女の子と男の子との手を引きながら横田畫工の御宅へ参りました、畫工場へ這入つて見ると、二百も三百も可愛い子供の肖像が壁に懸けてあつて、まるで子供の展覽會を見に行つた様な心持が致しました、孰の肖像を見ても一種の言ふに言はれない品格を示して居ります、横田畫工の一生の大希望は奈何かして天使の顔を書き度いと謂ふのでありました、所が其の天使の顔を畫くには奈何しても、無邪氣な、潔白な、仇氣ない子供の顔を型として畫なくては、眞正の天使の顔は畫けぬといふ處から、子供の顔を人に由つては

無代價で書いて百も二百も自分の書工場の壁に懸けて居つたのであります、然し十年も一生懸命に子供の肖像を集めて居りましたけれど、今日まで自分が天使の顔を書く型にしたいといふ満足な子供は有りませんでした、けれ共今二人の婦人が連れて来た娘と男の子との顔を見て、横田畫工は心中に非常に悦びました、其の理由は、此の二人の子供は確かに、自分の大希望を遂す型になると、思ふたからであります、特別によく見ると女の子よりは男の子の方に、一種曰ふに曰はれない愛嬌があり、又何處となく高尚ところがあつて、奈何見ても無邪氣で、仇氣なく、昔キリスト様が子供を抱いて、「天國へ行くものは斯くの如きものである」とお仰せになつたのは確かに斯うゆふ子供であつたであらふと、合點たし程であります、横田畫工は此の子供の肖像を書いた後、此の子供の顔を型として、立派な天使の顔を書きました、此の天使の顔は、日本に始めて開られた萬國博覽會に出品して世界の人々の大評判を受けました、

此の天使の顔を見ると如何な人でも何となく、其無邪氣な小供の如な心になりました、横田畫工は天使の顔を書いて大成功した後、二十年経つて死土産として、其の天使の顔に對する悪魔の顔を書かうといふ希望を起しました、其の悪魔の型を取るには、東京は言ふに及ばず、臺灣まで出掛けて獄屋といふ獄屋は悉く見まわり悪人の顔を探したが、どうも思ふ様な型が見つかりませんでした、漸くの事で或る夏初めに北海道の獄屋へ来て、此處に自分の理想の型を見出しました、其の顔といつたら何ともいへぬ悪人相で、誰が見ても悪魔の顔といふのは斯うゆふ恐ろしい顔であらうと思ふ位でした、横田畫工は東京へ歸り、力一杯筆を振つて悪魔の顔を書き、天使の顔と悪魔の顔とを列べて壁に懸けて置きました、此の肖像は又日本中の大評判になりました、田舎から東京に参つたものは必ず横田畫工の畫工場の訪問つて、其の可愛い天使の顔の恐ろしい悪魔の顔とを見て感服しないものは一人もありませんでした、或日

北海道から参りました一人の奥様が、其の畫を見に参り、切に見詰めて居りましたが、忽にウンといふて氣絶してしまいました、傍に居つた横田畫工を初め家内のものは、水を飲ませたり薬を飲ませたり種々介抱致しましたので漸く其の奥様は、氣をふさかへし眼を開いて先生に向ひ、

奥「どうも御世話になりました、誠に有難ふ御座います、私の天使の顔と悪魔の顔とを見まして、非常に驚きました確かに先生は此の天使の顔も悪魔の顔も、私の義理ある子供の顔から寫りなすつたのに違ひありません。」

といふて懐から二枚の寫眞を出して見せました、横田先生は此の寫眞を手に取り熱々見て居りましたが、

横「ウン、正しく此の子供の顔が私の理想の天使の顔で、此の青年の顔が私の書いた悪魔の顔であります、これがどうしてあなたの子供であり

ますか。」

奥「はい、御存知かも知れませんが、私は二十年ばかり以前、此の子供を連れて肖像を畫いて戴く様に御願ひ申しました事が御座います。」

奥「はい其の子供の顔がこの天使の顔を畫く型になりました、然し悪魔の型は北海道の獄屋で得たのであります。」

奥「はい其の獄屋で得られました悪魔の顔の型は、小供の時に天使の型となつた子供と同じ子供であります。」

横田先生は此れを聞いて目を丸くして驚きました、奥様に言葉を續け、奥「感化といふものは實に力あるものであります、あの子供は私の義理のある子供でありますがあの子供の親はあまりよい心懸の人ではありませんでしたので、私共夫婦して大切に神様に祈り、教育致しました結果、悪い性質はなくなり、それは／＼善い性質となり、天使の顔の様な優しい

顔を持つて居りました、處が私の夫が商用で支那の内地へ行かねばならなくなりましたから、せん方なく其の子供を私の友人に托して参りましたすると、數年経ぬ内に悪い朋友と交はり、酒は飲み博奕を致し、其の上句には盗人となり人殺まで致す様な悪人となつて、終に終身懲役を宣告せられたのであります、此の天使の顔と悪魔の顔とを見るにつけ、非常に教育の大切な事を感じるのです、あんなに善かつた子供でも教育を悪くするとこんな悪魔となつてしまふのですからね……。」

と涙をながして長物語を致しました。

第五十八 大 飢 饉

本年は幾日となく雨が降り續いて、氣候は例年より寒くありました、其上六十年此方になき大暴風で、日本全國で米の出來が悪く、殊に青森地方は大飢

饉で米と云ふ米は藥にしたくともありません。それ故米はお金よりも貴くなりました。青森地方の片田舎で新井村と云ふ廿八戸ばかりの小さい村里がありましたが大概相應の暮らしをして居りまして、どの百姓の家でも大きな物置と藏があつて二年位飢饉が續いても少しも困らぬ様に米が貯てありました、この村に庄兵衛と申します五十位の百姓が三人の子供を持つて居りました、一人はお糸と申しまして十才ばかりの娘、他は正一と莊作で十二才と十五才になる男の兒でしたが、何不自由もなく子供も學校に送り後生大事と妻のおまさと共に五人家内で煙を立て、居りました、世の中には夫が善ければ妻がわるく、妻が善ければ夫がいけないとか、一人の子供が強ければ他が弱いと云ふ様に、皆々そろつて善いと云ふ事は誠に稀であります、然し此の家族は實に感心でありまして庄兵衛は質朴であるのみならず誠に愛心に富み、人の困窮て居るのを見ると自分の貯へて置く米でも何でも恵んで助けてやります、妻のおまさも中々

の慈善家で哀な人に水一杯でも與へるのは其人にするにあらず神にするものと信じ、隣村にでも氣の毒の人があると遠き路を厭思はず助けに出かけると云ふ様な具合に、似たもの夫婦とは誠に此庄兵衛おまきを云ふのでありましやう、此夫婦に感心な子供のあはるは當然の事であります。

お糸はまだ十才位の娘であるのに、母さんが少しでも病氣であると朝早くから起き臺處に立働いて萬事を引請け、母の苦しい顔を見せた事などは爪のあか程もありません、何時でもニコニコ顔で笑ふときには何とも云へぬ微渦が頬のあたりにかじやさます、人は皆微渦お糸と綽名で居りました。けれどもお糸は少しも高慢の心を起さず常に謙遜でありましたから、後にはどんな善い女になるのであらうと誰も驚かぬ者はありませんでした、次男の正一は其名にたがはず正直一片の兒で一言たりとも他人にも親にも欺を云うた事はありません、學校の子供達は正一と言はず正直正太夫と綽名して居りました、長男の莊作は小

々病身で鬱ぐ性質でありましたが親の心に似て同情の厚い事、自分が三度の御飯を二度にしても困つた人を助けるのが好きだと云ふ程であります、冬の寒い日に學校などで穢ない衣服を着て寒むそうにして居る子供があると、誰にも知れぬ様にして自分の衣服を與ると云ふ程愛心の厚い子供でありました、飢饉の時には誰でも自分の事を思ひ他人を顧るいとまはありません、自分の生命が大事と思へばこそ少しの貯米でも大事に藏にしまひ込み、なか／＼一粒でも他人の口などへ入れさすものではありません、處が庄兵衛家内は飢饉と聞いて自分の藏をしめる處でなく、飢饉に用意の米をもをしげもなく施こし、何百人と云ふ人の生命を救うてやりました、人から見ると實に馬鹿の様であります、自分がひもじい目をして人を肥やし、自分が死んでも人を助けると云ふ事は通例の人には餘り馬鹿げ過ぎてわけがわかりません、なれどもこゝが人の貴い處であります、此心がなければ人の人たる價がないのです、自分さへよければ人

はどうでもよいと思ふのは慾の頂上でありませぬ、庄兵衛は自分の貯の米を
残らず人に施し、後には木の葉や木の根をあつめて食物として居りましたが、
それも残らず食ひ盡してしまひ内に居る禽獸や鶏でも猫でも犬でも鼠でもな
んでも皆食ひ盡してしまひました、最早食はれる者は何にもなくなりました、
五人の者は互に顔見合はせ、此上は如何しやうと言はぬうちから、互に心中の
憂に自然と顔にあらはれました、お糸は熱涙をぼろ／＼と流しながら、

糸「お父さま、お母さま、私は女で一番年のいかない者ですから、何か私を
殺して私の肉をたべてしはしの生命を延ばしてください、正兄さまも莊兄
さまも是かな大きくなつて、お父さんやお母さんを大事にしてください、
さあ早く。」

と申しますと、次男の正一は悲しい聲で

正「なにさ糸ちゃん、この家には二人男の兒は居るが女はお前一人だ、男は

兄さま一人居れば澤山だ、私は無用の物、糸ちゃんは大きくなつて母さま
や父さまの病氣の時は必ず入用だ、どうか私を殺して暫しなりと生命を支
へてください、私の様な者でも何か役にたてば幸福です。」

兄は聞き終らぬ内にワァーと泣き出しまして、妹弟の手に取りすがり

莊「糸ちゃんや、正ちゃんや、私は此病身で何時死ぬか知れない、今日あつ
てあすわからぬ者であるから、どうか私を殺して頂戴、そして助米の來
るまで生命をつないでください、これが一生の願です。」

と涙にむせんで頼みつゝ握つた手を容易にはなしません、両親は此有様を見て
胸せまり心亂れて悲と喜の涙を流しました、両親は三人の子供に「まだ一
日や二日は水を呑んで居ても生命はあるから、萬事を神にまかせて氣をたしか
に持たなければならぬぞ」と言きかせました、其夜うと／＼子供は睡むりしを
幸夫婦二人で萬一助米が來ぬ時は三人の内どの子供を殺して生命を續け様か

と相談致しました、妻は糸の寝顔をながめながら、

妻「あーあの兒はよくまあ私に似て居る、御覽なさいあの寝顔を、それに何日も何も食べぬのはあのうつくしい顔、寝て居ても微渦が顯はれて居ります、あーあの氣高顔、どうして殺せませう。」

と申しますと夫の庄兵衛は正一の寝顔をながめながら、

庄「おいおまさ、あの正一の顔を見な、寝て居つても正直な性質を現はして居るそれ目つきが己に生き寫つし、どうしてあの子を殺されやう。」

妻は聲をふるはせながら、

妻「庄作はいつも病身であるが、今日に限つてあの寝顔を御覽なさい神の使の様な顔をして居ります、親の身に取つては子供の身體の弱いのが一番可愛くありますどうしてあの可愛子供を殺せませう。」

と申しましたが、三人の内どれを殺すと云ふ譯に参りませんから兩親も非常に

こまりましたが、愈々大決心して自分達が死んでも三人の子供を助ける事に致しました、これが親の心です。

三人の子供は目を覺まして見ると、父さんも母さんも各々手に短刀を持ち今にも自分で自分をさし殺さんとする有様でありましたから、驚いて其短刀をおへますと、兩親とも聲をそろへ。

兩親「お前達は誠に親孝行の子供たちである、お前達の生命が大切であるから、この兩親の肉を食へて暫し生命を延ばし、親のあとをついで神の榮を顯はしてください、これが最後の別れだよ。」

と、子供の止む手をむりに離し、一刺に刺さんとする一刹那三四人の男が大聲あげて、外から、東京から今助米がつかまされた、およろこびなさい」と叫びこみました、此聲を聞いて兩親は思はず握れる短刀を落しました、嗚呼なんとまああふない事ではありませんか、神様はこの感心な夫婦、とこの親孝行の三ノの

子供をお助けになりました。

第五十九 かきの初なり

或る家に竹太郎と云ふ十才位な男の子と、十三四才になるお雪と云ふ女の子とがありました。此の二人は眞實の兄弟でありましたが、其の性質と云つたら恰度正反躰で、白と黒、夜と晝の様だとも云つたら適當でせう、お雪は深切な慾の無い子で、何度困つてる子供を見れば、自分は食べないでも助けてやり、又家に居る時でも好くお母さんのお手傳をして、お前は感心な娘だと常も褒められて居りましたが、其に引き變へて竹太郎は、大慾張の悪戯者で、御飯の時などは勝手に魚の大きなのを取つて終ひ、他所から御菓子でも貰ひますと、直ぐ自分で取り上げて他人に與りません、何でもかんでも自分さへ甘ひ物を澤山食べ、自分さへ綺麗な衣服を着て居れば、他人は腹が空かうが、寒くて凍え

様が、左様事は蛙の頭に水をかけた様な物で、何とも思ひません、唯自分の慾計り張つて居りました、おつ母さんもお雪も、如何して此の性質を直してやらうと勤めましたが、仲々直りません強慾と云ふ者は困つたものです。

或る日親類の吉次郎と云ふ七才になる子が遊びに来ましたから、おつ母さんは大きな林檎を買つて來まして竹太郎にあてがひ、

母「竹ちゃん、この林檎の皮をむひて二つに切り、大きな方を吉ちゃんに與つて、小さな方をお前取り、」と申しますと、竹太郎は初め變な顔をして居ましたが、聽て庖丁をおつ母さんに渡し、

竹「お母さん、僕は切り役は御免だ、吉ちゃんに頼んで下さい。」
と云ひました、母は竹太郎の性質をよく知つて居ますから笑ひ乍ら、

母「吉ちゃん、其れぢや此の庖丁で二つに切り、大きな方を自分で取つて小さな方を竹ちゃんにあげて下さい、」と申しますと竹太郎は不意に大聲で、

竹「おつ母さん、それなら僕を切り役にして下さいよ。」

と吉次郎から庖丁と林檎とを取つて終ひました。まあ何と慾張な子供ではありませぬか。

竹太郎は此様子供ですからおつ母さんやお雪の心配は大したもので、何時でも神様にこの事をお祈りして居りました。

其の内に家にあつた柿の木が段々實が結つて、今ではまつ盛りでもう充分食べられる様になりましたので、お母さんは竹太郎を呼び

母「竹ちゃん、あの柿は私共が食べる前に初なりを神様に上げるのですから、其れまでは食べてはなりません。」

と申しました。竹太郎は變な顔をして

竹「神様は柿をお食べなさるの。」

母「お食がりなさりますよ。」

竹「僕はおつ母さん、先達稻荷さんに澤山お備物があつたから、何時食べるか待つて居ましたが、何時迄居ても食べませんから近所の子供に聞かすと、神様はあんなものを食べるものかと笑はれましたよ。」

と申しますので母は

母「眞の神様はお稻荷さんと違ひ何でも私共の、お備物をお食りになるのです。」

と教ました。

二三日経つてからお雪は、柿を十箇計風呂敷に包んで來まして

母「竹ちゃん、是からこの初なりの柿を神様を捧げに行きますから一緒に出でなさいな。」

と申しました、竹太郎は變に思ひましたが後から従ひて行きますと、お雪は穢ない裏棚の方に行きます、余り變ですから竹太郎は

竹『雪ちゃん、此様穢ない所に神様が居るの。』
と尋ねました所

雪『あゝ左様だよ、眞實の神様は如何穢い所にも居らつしやるのよ、まあ好
いから私につひてお出で。』

と申しますので竹太郎はいよく變に思ひ乍らも従ひて行きました、するとお
雪は二間間口の陋ない家の所に参まして、

雪『竹ちゃん、此處に神様がお出になるから静かにしておとなしくして呉れ
なければいけませんよ。』

と云ふて其の戸口を開けて内に入りました。

内には一人のお婆さんが涙を流し乍ら、一人の娘の看病を致して居ります。

其邊の有様と云つたら壁には空間があり、天井はすゞだらけで眞黒く、何とな
く陰氣な嫌な心氣が致します、お雪は其のお婆さんの側に行つて

雪『今日は如何です。』

と親切に尋ねました。お婆さんに涙を流し乍ら

婆『はい誠に有難う御座います、お陰様で大層よう御座ひますがまだ熱があ
つて、始終うなされて困ります。』

雪『まあそれは御心配で御座りませう、然し神様は決して捨て給ひませんか
ら絶えずお祈なさい、其からこれは少し計りですが私の庭の初なりの柿で
すので、今神様に捧げ捧と持つて参りました、何卒お浪さんに上げて下さ
50』

婆『まゝと有難う御座います、嘸かしお浪も嬉しがらでせう。』

この聲にお浪は目を醒まし、其の清しい眼をバツチリ開ひてお雪に向ひ

波『あゝ有難う、神様はいつも私と共に居り給います、それでは私が神様の
代にいたります。』

と云つて清い一滴の涙を流しました。

是を見て居た竹太郎の心は如何様でしたらう、竹太郎は今非常に感じたのであります、自分は今迄唯自分さへよければ他人は如何でもよいと思つて居た、住む家もなく、着る衣服も碌にない人もあるのにあゝ悪かつた。あゝ恥かしい、又神様に捧げると云ふのは稻荷様や、天神様に捧げるのだと思つてたが左様ではない、神様にあげると云ふのは、貧乏な困つて居る人にある事だ、僕はこれから生れ懸つて姉さんの様な人になりたいと大變悟つたのであります。

竹「姉さん、僕は初めて了解りました、僕は慾張りを止めます、これから情深い人になります。」

と申しました、姉は心の中に喜びましたが故意と竹太郎の心を試そうと思つて、

姉「竹ちゃんそんな事を云つたつて、ちぎに亦元に歸つてしまふのでせう。」

竹「イエ、僕はいつまでもやり通します、虚だか誠だかまあ見て居て下さる。」

と申しました。

その翌日の事です、竹太郎は獨樂を買ふ爲に五錢もらつて外に出ました、すると門の前に十計りの女兒がしきりにメソソ泣いて居ますので竹太郎はなぜ泣くのかと尋ねますと、女兒は漸く面を上げて

「今お母様に上げる卵を買つて参つたんですが遂倒んでそれをこわしました。」

と申しました、竹太郎は直に

「それでは泣かなくてもよいよ、僕がそれを買ふお錢を下げるから。」
と持つて居た五錢を皆やつてしまひました、丁度雪子は外から歸つて來りました、だが此の有様を見て大層喜び

「竹ちゃん、姉さんはもう決して竹ちゃんを疑がいません、竹ちゃんはほんとに、心が變りました。」

と申しました。

第六十 鷓鴣の萬歳

或る日吉太郎と云ふ十三四になる子供がお父様に申しますには

吉「お父様！今日は半どんですから、花見かたぐい叔母さんの家に連れて行

つて頂戴な、ねへお父様！おばさんは私が行くといつても御馳走をして下

さいますよ。」

と頻りに願ひました、時は丁度四月の初旬で上野の花も盛んに咲いて居るし、又父も子供の願はいなみ難いので、お花見傍々連れて行つてやらうと承諾いたしました。

吉太郎は大喜びで直ぐに着物をきかへてお父様と共に本郷のお婆さんの家に参りました、お婆さんは常に吉太郎を愛して居りましたから吉太郎の顔を見る

と、何とも云はれなく可愛くなつて、いろいろ取なしてくださいますから、吉太郎もお婆さんの顔を見るのを何よりの楽しみとして居りました、お婆さんは今日も吉太郎が来たから御馳走の用意をする爲に臺所に行き、又お父様は店に用事があつて居りませんから、吉太郎は獨り客間に居りました、すると隣りの部屋で何か人聲がしますから耳をそばだて、聞いて居りますと、

「馬鹿野郎何しにやつて来た、此の家には何も食べる物はないぞ、早く歸れ馬鹿野郎。」

と云ふものがありました、吉太郎は短氣な子供でありましたから、怒つたにも怒らないにも眞紅な顔をして、

「なに馬鹿野郎だと、失敬な奴だこんな家に誰が居るものか。」

と大へん腹を立て、居る處へお父様が入つて来ましたから、吉太郎はいきなり、
長「お父様僕はもう直ぐ歸ります。」

と云ひました、お父様は驚いて、

父「吉太郎！馬鹿をお言ひでないよ、今来たばかりではないか、其におぼろんは今御馳走をこしらへて居るのに歸る者があるものか、未だ櫻の花も見ないじやあないか、お前は大人顔が赤いが心地でも悪るいのか。」

吉「悪るいともく僕は何も要りませんから直ぐ歸ります。」

と云ひましたから、お父様も少し變に思つて、

父「餘りわけが解からないじやあないか、何か理由があるなら話してこらん。」
と問ひましたから、吉太郎は

吉「だつて今隣の部屋で僕に馬鹿野郎何しに來た、この家には何も食へる物はないぞ、早く歸れ馬鹿野郎と云ひましたから、僕だつてこんな事を聞いては一分間も居るのは否ですから、今直ぐ歸ります。」

と云ひました、お父様も是には閉口して居りました、するとおぼろんは何か父

と吉太郎と云ひ争つて居るのをきつて急いで來て見ますと、吉太郎はいつもと違つて赤い顔をして「歸へるく」と云つて居りました、お父様もおぼろん吉太郎の歸へりたい理由を有りの儘話すのは氣の毒だと思ひましたが、云はなければおぼろんには了解せんから、ありのまゝに其の理由を話しますとおぼろんは「ハ、ハ、ハ」と笑ひ出しました、吉太郎も父もおぼろんがなせ笑ふのか少しも了解せんが、おぼろんは尚ほ笑ひながら、

叔母「吉や了解たよ、お前の歸へりたいと云ふのも無理ではありません、さあ

隣の部屋へおいで。」

と云つて唐紙を開けますと、一羽の鸚鵡が柔和しい聲で、

鸚「おやまあよくいらつしやいました、何も御座いませんよ、何卒御ゆつくり御休み下さい、萬歳！くくく。」

と叫びました、吉太郎は是を聞いて、いかにもおかしそりに「ホ、ハ、ハ」と笑

ひ出しました、するとお父様もおばさんも一緒に笑つて居りましたが、吉太郎は急に今までの事は何處へ行つて仕舞つたか、

吉「おばさん好い鳥ですね、何處で買つていらしやつたの。」

と聞きますと、叔母さんは

叔母「この鸚鵡は先日四谷の叔父さんが英國から持つて歸つたのですが、此の位よい聲の出る鸚鵡はないそうです、其れにどんな事を教へても憶へない事はありません。」

と云ひましたから吉太郎は、

吉「叔母さん、暫時この鸚鵡を僕に貸して下さいな、僕は馬鹿野郎なんかと云ふ事は教へないで善い事ばかり教へますからね叔母さん。」

と強ひて頼みますから、叔母も吉太郎の願ひを聞き入れて、しばらく貸してやりました。

吉太郎はごしやう大事に鸚鵡にいろゝの事を教へました、歌も三つ四つ教へたし聖書の言葉も主の祈も十誠も教へました、其故吉太郎の妹のお初が主の祈をして「我儕が人の罪をゆるす如くに……」と云ふてあとをこらへて云はずに居りますと、鸚鵡は大きな聲で、

鸚「我儕の罪をもゆるし給へ。」

とつき込みます、この様に中々愛嬌のある鸚鵡ですから、だれでもこの鸚鵡には感心しないものはありませんでした、

或る夜泥棒が吉太郎の家へ入つて吉太郎の大切な叔母から貰つた時計や、よ衣着物を盗んで出やうといたしました、すると鸚鵡が吉太郎から習つた、十誠の内の一つの誠の「盗む勿れ」と云のを大聲で云ひましたから、泥棒は其の聲に驚いて、ウンと云つたまゝ、一時氣絶して仕舞ひました、其の物音を聞いて家の者は起きて来て見ますと、十四五歳の子供が氣絶して居ります、よく見る

とこの子供が吉太郎の時計や着物を手に持つて居りましたから、直ぐに泥棒だと云ふ事が了解りました、なにはともあれ水を飲ましたり、體を撫ぜたりしてやりますと、漸ふこの子供はウ、ンと一聲大きな目を開けて、出ない聲をやつと出して、

吉「もう以來決して盗人は致しませんから何卒ゆるして下さい、あ、怖かつたくと心から其の罪を悔い改めました、此の子供は若藏と云つて、かなりの財産家の子でありましたが父は大酒の爲に中風になつて死に母は其を氣にして井戸に身を投げて死にましたので、未だ十四五歳であるのにいつも悪るい友達とばかり遊び、酒を飲みはじめただ、悪い事をして巡査の世話になつた子供であります、こんな悪るい子供です良心は持つて居りますから、悪るい事は悪るいと知つて居ります、其故「盗む勿れ」と云ふ神の御言葉を聞いて遂ひに善い子供になりました、斯の様に一羽の鸚鵡では

へ神様の御言葉を用ひて悪るい子供を善い子供に爲す事が出来ますから、まして私供人間は神様の使者となつて悪るい子供を導いて善い子供に爲なくてはなりません。」

第六十一 みかん廿五

中田省吾と云ふ子供は中々の勉強家で、小學校でも二番と下らない優等子供でした、友人からも學問が出来るので羨らひくと云はれて居りましたが、惜い事には肝心な處に瑕がありました、手癖が悪いのです、此きずさへ無ければ大した子供でありましたのに、あ、玉に瑕とは此省吾の事でありませう、母は日に日に心をいためて、何かして此手癖の悪るい病氣を癒してやりたいと思ひ、忠告したり怒た顔を見せたり、又或時は可憐そうだと思ひながらも手を擧げて打つ事もありました、けれどもなか／＼癒りませぬ。

或日母は近所の人を尋ねて行かねばならん用事が出来たので省吾を留守番にして家を出ました、省吾は客座敷の机の上に澤山蜜柑を置いてあるのを見ましてニコ／＼して「シメタ／＼母さんは八百屋からあの蜜柑を買つたばかりで敷を勘定して行かなかつたから、一ツや二ツ取つて食べてもわかりはしまい、どれ一ツやつつけませう」と思つて、客座敷へ入て蜜柑に手を付けますと不意に、入口の戸がガラリとあきました、省吾は愕然驚いてもとの處へ蜜柑を置き、どなた様です」と申しますと、入口の方から母が大聲で、省吾／＼と呼びました、省吾は其聲を聞いて青い顔を致しました、母は言葉を續けて、

母「省吾や、客座敷の机の上に蜜柑を二十五置きましたから、善く氣をつけて頭の黒い鼠に引かれぬ様に頼みますよ」

と云ふて再び外に行きました、省吾はつく／＼考へました、「頭の黒い鼠とは己の事を言ふたに違ない、僕は手癖が悪るいから鼠と云はるゝのか知らん、僕

を鼠と云ふのは餘酷い、然し鼠と云ふ奴はこそり／＼人の知らない内に押入に入つて居る美味物を引て行くから、手癖の悪るいのを頭の黒い鼠と云ふたのも無理はない、して見ると僕は鼠の類か知らん、先日學校で先生が、人間は猿の變た者だ、猿の子だと被仰つた時、僕はムツとした、鼠は猿よりはるか下等動物だのは、其の鼠の子とまでなり下がつては餘り残念である、何か僕も手癖の悪るいのを癒さんければならん、だが矢張りあの蜜柑が一ツ食べたいな、小供と云ふ者は食べてはならふと云はれると尙更たべたくなる者です、「お母さんは廿五あるとおしやつたが若しや廿六ありはしまいかしら、あれば僕の儲けだ」と勇さんで客座敷に入り、一ツ二ツ三ツ四ツ五ツと二十五まで二度も三度も敷へましたが、半分も餘計にはありません、省吾は非常失望しました。「困たな、お母さんの言うた通り二十五しかない、何とかしたら二十五の蜜柑を二十六にする工夫はないものか知らん、こんな時こそ手品師になりたいな」

と頭を下げて考へましたが、少しも善い考は出ません、そふこうする内尙々蜜柑が食べたくなりまして、とうとうお母さんの言付にそむいて、たつた一ツを盗すんで食べやうと決心しました、誰も家内に居ない事は知つて居ますが、それでもまだ心配で誰か見て居やあしないかと、四方を見廻しますと、床間の上にお父さんの肖像が飾てあります、其肖像がピカリ／＼光たこわい目で自分を睨む様でありますので、なんとなくこわくなつて折角取つた蜜柑をまたもとの處へ置きました、然し食べたいと云ふ一念で、手癖の悪いのは罪だと思ひながらもやめる事が出来ません、又蜜柑を手に取りましたが、又寫眞の目がこののです、そこで一工夫して袖から穢らしい鼻ふきを出して寫眞をく／＼つて目の處をかくしました、省吾は「これで大丈夫、もうお父さんでも見る事は出来まい」と早速、蜜柑をむいて口の中へ入れ様としました、が、突然寫眞を見ますと、寫眞の口が「省吾々々」と云ふ様であります、そこで又蜜柑を机の上

置きました、けれども最早とても我まんが出来ません、又外の袂からはなふきを出して寫眞の口のところをしばつて隠しました、「吁これで大丈夫、お父さんの目は盲、又お父さんの口も開かない、是で誰も見てる者はない」と、獨言を云ふて、むいた蜜柑を又口に入れ様と致しますと、今迄雨が降りそうに薄暗かつた天氣のが、忽かに明るくなつて、障子のすきから太陽の光がバツと差込んできました、省吾は又愕然持つた蜜柑を落しました、此の光こそお父さんの目よりも口よりも一種奇異様の恐怖心地を起させました、が、これでも手癖を癒そうと云ふ勇氣は起らず、障子を開けて椽側に出ました、所が墨汁を染めた様な眞黒けな恐ろしい雲の幾重も重なつて雲の間から、キラ／＼した太陽が半分顔を出して省吾を睨む様に照しました、省吾は非常に怖くなつて雨戸をしめて、眞暗にしてもとの處へ歸り慄えながらとう／＼蜜柑を食べてしまいました、すると不思議にも、食べる時には少しは美味と思ふて食べましたのが、食べて

第六十二 ゆりの花

咲太郎と云ふ十二三歳の小供が、革袋を下げて短い袴をはいて、學校に行く途中東京芝口の花久と云ふ大な花屋の前に参りますと、立派な雪よりも白と思はるゝ百合の花が、幾個となく店一ぱいに飾てありました、咲太郎は其花に見とれて愕然立て見て居りますと、突然に後から咲太郎の目をかくした者がありました、咲太郎は不意の事に驚いて、其手をつかまへてはなそうと致しました、餘程強い小供と見えて咲太郎の方ではかなわないので困つて居りました、すると其小供は咲太郎に知れない様に妙な聲で。

「咲ちゃん誰かあてゝ見な、あつたら離してあげるから」

咲太郎は其聲を聞くとぢきに

咲「あゝ眞ちやんだよ、當つたらう妙な聲をしてもだめだよ」

眞「そうよ、よくあつたね、妙な聲をしても駄目だな」

と云つて手を離されて見ますと、花久の店に飾てあつた百合の花は尙々光を放た様で一層うつくしく見えましたから、咲太郎は眞一にむかひ。

咲「おい眞ちやん、美しい白い百合の花だね」

眞「成程うつくしいね、君が何を見て居たかと思つたら、この百合の花に見とれて居たのだね、實に白な、ギリシヤと云ふ國の昔話の中に白い百合の花は神様のめしあがる牛乳からとび出たと書いてあるが、成程牛の乳から出た様に白いね、菊も薔薇も奇麗だが、百合の花は中々上品な花だ、君あの花の根を見た事があるかい」

咲「僕はまだ見た事がない、あんな美しい花が咲くんだから、さぞ根も美しいだらうね」

眞「誰でもそう、思ふのだが、實際はそうではないよ、根はね、玉葱の様に

丸くて見た處は何んだか穢ない物だよ、その穢ない根をよい土に入れて、水をやつたり太陽の光にあてたりするとあんなよい花が咲んだよ、僕等は何も知らないつまらないものだけれども、善い教育を受け、善書物を讀み善朋友に交はれば、神様が立派な小供にしてくださいと、百合の花の様にうつくしくなるのだよ』

咲「真ちゃん僕はあの白いうつくしい百合の花を一つ買つて學校へ持つて行くから一寸待ち給へ、十錢も出したら買へるだろう』

眞「君が買うなら僕も錢は澤山ないがをとものに一ツ買う』

と云うて眞一と咲太郎の二人は十錢づゝ出して二ツづゝゆりの花を買つて嬉氣に學校に参りました、すると向うから梅吉と云う十二三歳の小供が、穢ない破かゝつた革袋を下げ、帽子と云つたら穴が二ツも三ツもあいて居るのをかぶり繼はぎだらけのきたない衣服を着てやつて参りました、此小供のお父さんは決

して貧乏のお方ではありませんが、梅吉が生つき豕の様にきたない小供と見え、お父さんやお母さんがいくら新しい帽子をかつてやつても、新しい衣服を着せてやつても直ぐに汚してしまつて人に笑はれても平氣で居るのです。朝でもろくに顔を洗つた事はなく、又齒一ツ磨いた事もありません、顔は垢だらけ齒はしみだらけ、學校の仲間には皆梅吉と呼ばないで襤褸吉とよんで居りました、梅「真ちゃん、咲ちゃん、まだ學校の時間が早いからそろゝ行かうぢやないか僕は昨日溝へおちて足の指を怪我したので早く歩るけなから、と申しましたら眞一と咲太郎の二人は申合はした様にニコ／＼と笑ひながら、眞「君僕たちの間に這入て歩いて行き給へ、足が痛くば僕たちが助けてやるよ、いゝからそろゝ行き給へ』

と云うて咲太郎と眞一は片手で立派な百合の花をもち片手で梅吉を助けながら學校をさして歩いて参りました、すると横町から天狗と呼名されて居る慢吉

と云う小供が忽然にやつて来て、頭を高く振り上げ、いかにも高慢な顔をして、横平な言葉で。

慢「真ちゃん咲ちゃん、今日は乞食のお友達かね、今日は大した銭がもらへるぜ」

と云ひました二人はよく慢吉の性質を知つて居りますからをこりもせず。

咲「君ね、僕たちと一緒に行くのがいやなら此花をあげるから胸の處へさして先に行き給へ、僕等は梅ちゃんを助けながら後から行くから」

慢吉は禮も言はずに百合の花をもらつて胸にさしていつて学校の庭に入りました所が多勢遊んで居つた子供はみんな、慢吉が百合の花を飾り、梅吉が百合の花にかこまれて来るのを見て不思議に思つて居りました、何時もなれば学校の子供は一人でも梅吉の臭氣をいやがつて近よりませんのに、今日は百合の花の善い香の爲に梅吉のいやな臭は致しませんので、穢い衣服に目をつける者は

なく、みんな梅吉の傍へ参りました、これで梅吉は今日まで皆が自分の側へ近よらなかつた事を知り、また其わけは自分が今まで穢いなりをして居つた爲であると思つて居ましたが「自分も百合の花の様によい香をさせて、立派な着物を着て居さへすれば決して人から糞糞吉と云はれる筈はないんだ、嗚呼僕が悪るかつたと」氣がついてからはばろ吉と言はれた子供が一年もたぬ間に、百合の花と言はれる様に變りました。

慢吉が百合の花を胸にさげ大威張で學校の庭を歩いて居りますと、また八歳位のあどけない女の子が自分と同年位の女の子に

甲「お崎ちゃんあの百合の花をごらん」

さき「あーきれいですね」

甲「あの花はあんなに立派でも頭をあげずにうつむいて居るじゃありませんか」

旅人「ほんとうに偉いお方はあの百合の花の様ですね、
 と言ふのを慢吉は黙つて聞いて居りましたが、何氣なしに胸にさした百合の花
 を見ますと、成程美しい眞白な衣服をき、よい香をさせて、頭を垂れて居りま
 した、慢吉は其をじつと見つめて居りましたが、言ふに言はれぬ恥しさの念が
 浮んで来て知らず／＼頭をたれてしまひました。此時から、學校中に自分程豪
 い者はなく、頭を下げると値が下る様に思つて、威張れる丈威張つて居た慢吉
 も、生れ代つた様に謙遜な小供になりました。
 あゝ、只一ツの百合の花がかくまでよい働を致しました。私等も皆百合
 の様な立派な花になりたいものであります。

第六十三 鯨 船

直太郎といふ子供は新聞を読みながら登といふ子供に

直「あい登さん、コレ見給へ、大きな鯨の骨じゃないか」
 登「ウン成程大きいな、今度日本で占領した樺太は、鯨が澤山捕れる處だつ
 てねえ此の繪は樺太の都のアレキサンドルフスキ博物館の入口に、飾つてあ
 る鯨の骨だよ、」
 直「さうか、僕は未だ生きてきた鯨は見た事はない、如何かして見たいものだな
 あ」
 登「僕の伯父さんは、此度政府の許下を受けて、樺太へ鯨捕に出かけるが、
 君行きたければ僕が願てやるよ、君が行く勇氣があるなら、僕も一所につ
 れていつてもらわう
 と相談が定りまして二人はいよ／＼鯨船に乗り込み、樺太へ鯨取に参ることに
 なりました、さて直太郎と登とは船の内で、鯨に就いて大議論を始めました。
 登「直ちゃん、一鉢君は何の證據で鯨は魚ではない、獸だと謂ふのだ、手も

足もない獸がどこにあるものか、論より証據だ鯨は年中水の中に居るではないか、其上鱗もあれば、尾もあるではないか、繪で見た處ではどうしても獸とは見えない」

直「ものは必ず外形には由らないものだ、外部ばかり見て議論しても駄目だよ、僕等の學校の仲間の中にも、柔順しい様にもへて、戲謔なものもあるではないか、魚の様に見えても、獸の様な奴は澤山ある、あの花太郎を見たまへ、如何見ても柔しい小供としか見えないけれども、實は手癖がわるくつて僕は何度物の盗まれたか知れんよ、君外部ばかり見て、鯨は魚だといふ事は止め給へ」

登「だつて君が充分に證據を挙げない上は、僕は鯨はどこまでも魚だと思ふよ」

直「鯨は必ず獸だといふ確かな證據が二ツある、一ツは魚の血は必ず冷たい

然し獸の血は温かい、其處で鯨の血は奈何だかといふに、其の血は温かい、また魚は卵を産んで、其れを孵へすのだが、鯨は牛や馬の如に、卵ではなく、子供を産むのだ、そうして乳をのませてそだてるのだ如何だ是れでも未だ君は鯨は魚だと思ふか」

登は強情な子供で、何でも負ける事は嫌な子供でありましたが、此れには一本降参て、何とも答をする事が出来ませんでした」

登「成程左様確かな證據を挙げられてみると、鯨は魚ではなくて、獸だと思はれるが、奈何して獸が魚の様になつたのだらう、魚に成るよりは、獸で居つた方が善いではないか、またどうして獸が魚に變つたのだらう、君はなか／＼鯨の事に就いては詳しいが、此れにも説明が出来るか出来るならさあ話してくれ給へ」と先の議論で負けましたから、此度は一本降参らしてやらふと思ふて、強く切り止んで参りました。

直「登さん、僕は鯨學者ではないがね、昨日讀んだ「進化論」といふ書物の内に、其の事が詳しく書いてあつたので知つてるよ、君に話すから聴き給へ、世中には進化して進歩するものばかりではない、退歩するものが澤山にある、僕等の生涯も進むか退くか、何等に定まつて居るのだ、然し進むのは山に登るのが、難づかしい様に、難づかしいが退くのは、流れ河に棹す様に易しい、鯨ももとは立派な、象よりは大きな、獸であつたのだが、怠惰もので、毎日海岸へ来て、砂の上で働きもせず、毎日遊んで居つたものだから、いつの間にか足や手は、手足の用をしなくなり、其の内に手は鰭となり、足は尾鰭になつてしまい、歩くにも歩るけず、終う怠惰の結果、魚に成つてしまつたのであると、書いてあつた、僕等も人間らしい事をせず、酒を飲んだり、博奕をうつたり、僞言をいふたり、善い書物を讀まなかつたり、毎日怠惰けて居れば、終に墮落して神様から遠か

り、しまいには獸の様なものに成つてしまふよ」

登は此の話を聞いて感心して居りました。すると舟の先の方で、「鯨」といふ聲が聞えました、二人は狼狽で甲板に登つて参り海を見ますと、五十間もある大きな鯨が頭を高く上へあげ、大きな口を開いて、鼻から呼吸をして、十五間も高く潮を吹いて居りました。

登「直ちやん、愉快だなあ、見物だなあ」

直「登さん見た給へ、あの鯨の頭は大きいこと」

登「ウン體の三分の一は頭だ」

直「君目も耳も見へるか」

登「僕には鼻ばかり見へて、目や耳は見へない」

直「鯨の目も耳も見えなかつた處では、極く小さくて見へないが、水中に這入ると其の小さな目も耳も鋭くなるのだよ」

「登「あんなに大きな口を開いては、このやうに小さな舟はのみ込まれてしま
うだろう」

直「君心配したまふな、鯨は決して自分から他のものに害を加へないよ、過
つて害することはあるが、其は過失であるから詰める事は出来ない、又鯨
には歯がないから此の舟の様な大きな固いものは、飲み込んでも碎れ事は
出来ない、昔ヨナといふ人は、鯨に飲み込まれて、三日の間腹の内に居つ
たことがあるが、鯨には固い歯はないからそれで、飲み込まれても體に害
がなかつたのであらうよ、鯨は小さな魚ばかり丸飲に飲み込んで、舌の上
に棄せて、あとの水はみな吹き出してしまふ、それから魚を喰べるんだ」
直「直ちやん、見給へ、あの鯨の傍に何疋もくまた澤山の鯨が居るよ」
直「ウン、鯨は決して獨りでは泳いで居ないよ、何時でも一組を爲して居る
よ、あの一組の鯨の事を俗に鯨の學校といふて居るが、鯨は感心だ、いま

に亦獸になれるかも知れない、」

登「直ちやん、鯨の泳ぐのは早いねえ、あれ見給へ、」

直「一時間に十二哩や十三哩位は泳ぐよ、なかく活潑だらう」

登「あの鯨を一疋捕つたら幾何位の金になるだらう、」

直「あの位のならすくなくとも一疋で一萬五千圓から二萬圓の價があるよ、
鯨には益にたない處は少しもない、肉でも油でも皮でも骨でも、何一つ
として捨る處はないんだ、樺太は露西亞からとうく日本の手に返つて來
たから、これから僕等が一生懸命に働かさへすれば、鯨から入る金も太い
したものだよ、たしかに國を富す事が出来るよ、」
と二人は勢ひよく話して居りました、十四五人の水夫は手にく鐵砲や、
槍を携へて、いよく命懸けに鯨狩を始めました。

第六十四 二萬圓の眞珠

「魚よ〜」
といふて澁紙色の顔をした子供が魚籠を擔いで、麴町の通りをやつて來ますと、向ふから

「蜆よ〜」

といふて同じ年齢の蜆賣がやつて來ました、互に顔を見合せて、笑ひながら三助といふ子供は鐵公といふ子供に、

三「今日は如何だい、景氣はよいか」

と云ますと。

鐵「昨日は悉無駄目であつたが、今日は少しは良いよ」

三「鐵公貴様は餘程馬鹿だよ、否馬鹿正直だよ、昨日檀那が、此の魚は新ら

しいかと尋ねたら、貴様は此の魚はあまり新らしくないといふたではないか、新らしくないと云はれて、誰か買ふものか、自分は昨日は大當りさ、腐りかゝつた魚を安く買つて來て、皆新らしくといふて賣拂つてしまつた、而して五十錢は儲けたよ、然し今日は昨日の様な理にはいかない、
鐵「自分は今日まで、腐つた魚を新らしくと偽はつて賣つた事は、一度もな

すよ、」

三「それだから貴様は馬鹿だといふのよ、人を偽さなくつて商賣が出来るか

す」

鐵「自分は正直にさえして居れば必ず良い御得意が出来ると思ふよ」

三「馬鹿をいへ、如何な商賣でもな、偽言を吐はなくては出来るものか、偽言を吐くのが上手ならば商賣にも勝つんだ、金も儲かるのだ」

鐵「自分は縦例人が偽言を吐かすが、決して偽言は吐はぬ、腐つた魚を新ら

しい等といふて賣りつけるのは罪だ」

三「罪もくそもあるものか、いくら貴様は正直にしても、家に死にかゝつて居るお母に、薬一つ飲ませてやらないのではないか、正直にして魚が賣れなからうものなら、お母を殺してしまふよ、お母が大切と思ふならば偽言を吐うて魚を賣り金を家にもつて行かなくては駄目だよ」

といふて「鯉よ〜」といひなから行つてしまいました。

先程から此の二人の魚賣の議論を立聽して居つた、一人の商人風の旦那が。

「魚よ〜」

といふてあちらへ行く鐵公をよび止め

「おい魚屋、貴様は實に感心な奴だ、貴様のいふ通り正直は商賣の成功の秘訣である、聞けばお前のおつ母さんは餘程悪くて死かゝつて居るといふ事だが、今日の魚を皆己が買てやるから、早く歸つておつ母さんを介抱し

てやるがよい」

といふて一圓紙幣をやりました、魚賣の鐵公は禮をいひながら、一圓紙幣を戴き心の内に「此れが正直の結果だ」とほ、笑んで飛ぶが如くに自分の家に歸つて参りました、母は病氣も氣候の不順な爲かはかくしくなをりません、其内には何から何まで、家にあるものは、皆賣拂つて藥の代にしてしまいました、が母の病氣は少しも快方はなりません、鐵吉も此れには非常に困りました、鐵吉の母は魚賣の母には相似はない、正直な堅氣な女で、病氣の爲めに口もろくにまわらないくせに、衰へはてたる體をもちあげて、

母「鐵や、生死は皆神様の御手にあるのだから決して心配するには及びません。」

偽言をいはなくば魚は賣れなくとも宜い妾は偽言をいふて得た金で藥を飲むのはいやです、それよりは寧死んだ方がやうムいます、妾を思ひ過ぎて、一圖に

偽言をいふてはなりませぬよ』

と温い涙を流しながら、よくいふて聞かせました、鐵吉は如何かして、母の病氣を全快したいと思ひ、魚を賣りに出た歸りには、きつと藥屋によつて、藥を買つて來りました、或日鐵吉はふとした事から、牡蠣の内から一粒の美しい、石を見出しました、然し其の石が何の石であるか少しも解りませんでした、だが其の石の色があまり立派でありますから、例の藥屋の番頭さんに見せますと、番頭さんにも此の石は何の石であるか、よく解りませんでした、然し鐵吉を可憐想と思ふて二十五錢で其の石を買つてやりました、後に其の石を専門家に見せますと、この石は非常に珍らしい眞珠であるといふ事が解りました、眞珠には種々の色があります、虹の様な色のあるものもあり、又黄色のものもあります、其の内でも透き通つたのが最も珍らしいのであります、日本人や支那人は黄色の眞珠を貴びますが、西洋人は白色の眞珠を珍重致します、眞珠といふも

のは、或る人は露の凝つたのだといひ、或る人は女貝の玉子だといひ、又牡蠣の傷を負ふて流す涙が凝つたのだといひますが、今日眞珠に就いて詳しい人に聞きますと、眞珠は決して健康な牡蠣にはできないで、病氣の牡蠣にのみできると申します、藥屋の番頭が買つた二十五錢の眞珠は、一日の内に千圓で買手が出來ました、番頭も夢の様に思ひ、其の眞珠を千圓で賣拂ひました、此の番頭はなかく同情の厚い人で鐵吉の母が大病であるといふ事を知つて居りましたから千圓の内五百圓を分けて鐵吉にやる事にしました。さてその番頭はやつとの事で鐵吉の家を尋ねあてゝ。

『もし〜』

と申したが、何の答もしませんから、いきなり上つて見ますと、鐵吉は母の傍に泣き伏して居りました。

番「おい鐵ちゃん、おまへが先きに二十五錢で賣つてくれた石は、非常に高

價なもので、千圓で買手が直ぐあつたから、賣て來たが二十五錢で買つたものを千圓に賣れたからといふて、千圓を皆自分のものにするのはすまな

いから、千圓の内五百圓をお前にやりに來たのだ』
と申しました、鐵吉は生れてから五百圓といふ大金を見た事はありませぬから、五百圓を手にして非常に驚きました。

鐵『それではあの奇麗な石は眞珠でありましたか、嗚呼ありがたい、此れが神様からの贈物です、此の五百圓さえあれば、母は充分な手當も出来るし、又若し萬一の事があつても立派な葬式を出す事が出来ます、有難い〜』
と喜の涙を流しながら、度々頭を下げて御禮を申しました、此の二十五錢の眞珠は千圓より二千圓となり、先年開られた米國セントルイ萬國博覽會に日本より出品した二萬圓の眞珠は此の二十五錢の眞珠でありました、まあ何と奇態ではありませんか眞珠は病氣の牡蠣から産出する通り、此の二萬圓の眞珠は

哀れな大病人の息子の魚賣の家からでました。

第六十五 すみれの御紋

「郵便！ 郵便!!」と勇ましく叫ぶ聲に十二三歳のお梅と言ふ娘が、急いで馳けて來て、郵便配達の手から一封の手紙を受取りました、お梅は其上書を見て莞爾しましたが、直にお母様の室に馳けて行つて、「お母様、お兄さんから御手紙が参りました」と申しました、お母様が明けて御覽と仰しやいましたので、お梅は嬉々と封を切つて見ますと、急に何とも云へぬ奇い香が致しました。

梅『おや、お母様、お兄様が戦地から誠によい香のする花を送つて下さいましたよ』とお梅の手紙の間から出た小さい花を手に取り上げて暫く見凝めて居りましたが、何の花だか分らないと見えて、お母の處に持つて参り、

梅 「これ、お母様何といふ花でしょう、まあ佳い香ではありませんか、戦地にも斯麼美くしい花があるのでしやうかね」と申しました、母は其花を手に取つて香を嗅ぎ乍ら、

母 「これは菫と云ふ花ですよ」

梅 「矢張り菫でしたか、何だか菫に似て居る様に思はれましたが、餘り美くしいもんですから何か他の花ではないかと思ひましたの、菫なら昨日竹藪の中に咲いて居りましたのよ、ほんとに妾この花好よ高尚て品がよくつて……」

母 「ほんとに左様なんですよ、昔から此菫は愛の印標になつて居て、希臘や羅馬の古い話を讀んで見ると、色々この花に就ての逸話が出て居ります、梅 「それでは阿母様、妾が兄さんに送るこの毛糸の靴下を編んで居る中に、そのお話をして頂戴な」

母もお玉と云ふ娘の給を縫ひながら、菫のお話を始めました。

母 「昔、羅馬の立派な貴族のお姫様が、尼寺に入つて尼の修業をして御居になりました芳紀は十七か八で、妾と云ひ心立といひ、誠に申し分のないお方でありましたが、不圖した事から門前をお通りになつた殿様を慕ふ様になりまして、けれ共何しろ尼寺で修業中の事ですから、門外に出る事が出来ず、又それかと云つて手紙を出す事も出来ませんので唯明暮心を惱ました居りました、それにしても這麼して自分の心だけを殿様に知らせたいものと、色々苦心をいたしました末遂々厚い石壁に穴を明けて其處から思を合めた品を出そうと決心しました」

さて、お姫様は人に知られない様に隠れく一生懸命に壁を穿つて居りましたが、熱心の力は大了た者です、其可弱い女の腕で、遂々厚い石の壁を貫通く事が出来ました、そうして殿様のお通りになるのを待つて其小さな穴から思

を籠めた花を出しました、その花がこの莖であつたのであります、

お梅は聲を潤ませて。

梅「お可愛そいなお姫様ですわね。そうして其殿様は何ともお思ひなさらないかつたでせうか」

母「殿様の方でも、その美しくいお姫様の姿を見て、慕はしく思つて居られたのです、嗚その莖の花を見て嬉しく思ひになつたでせう、」

梅「妾は唯この花ばかりではなく、この色を見ても何とも言へぬ思ひが致します、」

母「この色は英語では「ブリウ」と云つて紫に少し青味掛かつた色です、若しこの色が此れより少しでも淡ければ人の目には見えません、即ちこれが人の目に見える極限の色なのです、又赤や白や色々の花がありますが、若しあれより少しでも濃くなれば矢張り見る見は出来ないのです、」

梅「お母様、この花は愛の標章の他に、何か氣高い意味を顯はしては居りませんか、」

母「居りますとも、此の花は聖いと云ふ標章になつて居ります、猶太の都に眞の神様の殿堂があります、其殿堂は實に立派なもので、其中にはモーセと云ふ人が眞の種様から頂いた十誠の彫つてある石が安置てあります、其十誠のある室の前にかゝつて居る幕はこのすみれ色であります、それは一目見ても聖嚴を感せしめる様な色であります。又畫師がキリストの御姿を想像して描いた畫を見ましても、キリストの表服の色は常もこの莖舞になつて居ります、キリストは聖の聖なる御方でありますから、其聖なる所を表はす爲に、畫師が特別に此莖色を用ゐたのであります、よく晴れた日に空の色を見て御覽なさい、矢張りこの莖色をして居るでせう、猶太人が、衣物の裾は如何もこの莖色にしたのは、自分等は天の如く聖なる者であると

云ふ事を示す爲なのであります。』

お梅は菫の花をいじりながら

梅「阿母様、聴けば聞く程菫の花は貴とい花です、こんな貴い花ですから何處かの王様の御紋にでもありそうな者ですね、菊は日本の天皇陛下の御紋ですし薔薇は英吉利の王様の御紋ですのに、こんな高尚い花を紋になさる王様はないのでせうかしら、若し誰も用ゐて居るのでなければ、内の桐の紋を變へて此の菫の紋にしたらいゝでせう、ねえお母様」

母は微笑んで。

母「ナニ内の紋にしくともあの有名な佛蘭西のナポレオンの紋にはもう此花を用ゐて居ります、ナポレオンはあんな戦争好の皇帝でありましたが、此の菫の花が大好きで、自分の冠には平常この菫の花を付けて居られました、ナポレオンがその後戦に敗けてセント、ヘレナと云ふ淋びしい島に流

されました時ナポレオンの僕従の一人が大層悲しんで、「何時再び佛蘭西に返つて王様にお成りなさいますか」と尋ねましたら、皇帝は手に持つて居た菫の花を指さして、「この菫の花が咲き匂ふ時に歸つて来る」と御答へになりました、然ると果して、その翌年菫の花が盛んに咲き揃ひました時に、ナポレオンはセント、ヘレナの島を逃げ出して、再び巴里の都にお歸りになりました、其時人民は各々手に菫の花を持つて、狂へるが如く歓迎致しました」

梅「お母様、この花は他の櫻や梅の花と同じ様に出て居るのですか」

母「いゝえ、大變違つて居ります、櫻や梅は澤山の花片が集まつて一つの花になつて居りますが、此の菫の花では、一片一片が花なのです、お梅様も菫の話を知りたしたら、此花の様に高尚い女にならなければいけませんよ」と話して聞かせました。

お梅は非常に此話に感じまして、自分もどうかしてこの菫の花の様に愛と聖との徳を養ひ、神様からも又人からもあの娘は實に菫の様に聖い、愛に満ちた女だと云はれる様に努め様と決心致しました、そして其日から自分の室には冬となく夏となく常に菫の色を絶やさず、これを友として愛して居りました。

第六十六 蟻の先生

七八人の子供が或る日學校で先生のおいでになるのを今か今かと待つて居りました、が、どう云ふ理由が課業が始まる時間が來てもまだお出になりません、小供達は首を長くして溫和しく腰掛に腰を掛けて待つて居りますと、大きな一疋の蟻がノコノコといつも先生のお座はりなさる腰掛の上に登つて参りました、子供等はじつと其の蟻を見て居りましたが、蟻は何だか物を云ふ様に見へました、すると蟻は靜かに口を開いて、

蟻「皆さん今日は先生は少し御病氣でおいでになる事が出来ませんから、私は先生の御庭に住んで居る蟻で御座いますが、先生のお代りになつて皆さんに蟻世界のお話しを致しに参りました、どうか私の話しを聞いていたゞきたいものです」

と申しました、そこで子供等は思はず頭を下げて

小供「蟻先生どうか願ひます」

と申しますと、蟻先生は面白い蟻のお話しを始めました。

蟻「先づ第一に家のお話しを致しませう、皆さんのお住居なさるお家は大概は二階屋で淺草の公園に参りますと、十二階の家がありますが、恐らくはそれ以上の高家は日本にはありません、米國のニューヨークと云ふ町に参りますと、二十階も二十五階もある家があります、天に届きそうなお家だと云うて驚きなされるかも知れませんが、私の棲んで居る町は東京の町よ

り人口も多く其の上二十階地の上に出て二十階地の中に入っている四十階の家もあります、日本では日光の御霊所が一番立派だと申しますが私供の國にも日光の御霊所より立派な彫物をした家が澤山御座います、皆さん家の事はもう御解りになりましたでしやうから、第二に子供を養育てる御話をいたしましょう、私共の家には必ず嬰兒を養育てる部屋があります、この部屋には數萬の蟻の嬰兒が居つて一寸見た所では白い御飯粒の様であります、これは皆蟻の嬰兒であります、この蟻の嬰兒を養育てるには澤山の乳母が居つて毎日顔や躰を洗つて高潔にしてやるのです、其急忙さといつたら目もまわる程です、あなたがたの様に手拭でふいてはやりませんが手で清潔にしてやります、又一日に三四度は御飯を食へさせなくつてはなりません、又嬰兒を一つ所に置いては倦怠しますから時々は違つた所へ連れて行つてやるのです、又寒い時には暖かな所へ、暑い時には冷

しい所へつれて行つてやらなければなりませんし、又夜が明けると太陽のてる一番暖な部屋につれて行き、日が暮れば一番下の暖い部屋につれて行かなくてはなりません、私供の家では乳母ほど忙しい者はないのです、小供を教育と云ふ事は一番大變な役目であり、これで嬰兒を養育る御話はお解りになりましたでせうから、第三に働の有様をお話し致します、私供は冬になると働く事は出来ませんから、食物は皆夏の内に用意して置くのです、幸な事には蟻の世界には惰る者は一人も居りません、墮る者は居たくても居る事は出来ないのです、私供は朝早くから夜おそくまで皆働きます、働は分かれてゐて大工は大工、堀工は堀工、石屋は石屋、土方は土方、兵隊は兵隊とちやんとさまつて居りますが、何か仕事をする時には皆總掛りで爲ます、若し何かの種が落ちて居りますと直ぐ同輩の者にあいずを致しますので、何百何千の蟻が集つて来て山の様

な大きな物でも多勢で家に運び込みます、一人で出来ない事は二人で爲し、二人で出来ない事は三人と皆心を合せてやれば如何な事でも出来ない事は決してありません、先日も大雨で川の橋を流されて向の岸にある物を運ぶ事が出来ませんでしたから一疋の蟻が此方の岸の木にしつかりと右の手でつかまつて、左の手を伸ばして他の一疋の蟻の手を捕へますと又一疋の蟻が同じ様に補つてだん／＼に澤山な蟻が手を握り合つて遂々長い橋を作りました、すると他の蟻は其の橋の上を渡つて向の岸にある食物を運びました。斯の様に何を爲すにも心を合せてやるのですから、どんな困難しい事でも出来ないといふことはありません、皆が心を合せてやりさえすればどんな橋にも勝つことが出来ます、又私共は子供でも大人でも中々辛棒強つて三度や四度位やり損つたからと云うても何とも思ひません、一つ事を爲すにも五十度でも百度でも出来る迄は止めません、一度やり始めた事を

中途で止す様な意氣地のない者は一人も居ません、蟻は少くつても馬鹿には出来ません、皆辛棒強くつてしつかりして居ます、又私共は何を爲すにも有る限りの智慧を出ます、ぼんやりして居つては何一つ爲す事は出来ません、此の間も或る家の下女が私共が餘り砂糖を食べるのですから如何かして私共に食べさせない様にといろ／＼の方法で私共の來るのを防ぎましたが、どうもうまくゆきません、そこで疝癪を起して砂糖を高い天井の真中に吊り下げました、そうして之から大丈夫と思つて安心して居りましたのを、私共は色々に智慧をめぐらして、どうかして天井に登らうと苦心し、とう／＼柱を傳つて砂糖のある所へ參る事を考へ出しました。そうして此の事を數多の同輩に知らせましたから何百疋も私共のあとに附いて來て一日の内にたくさんな砂糖を食べてしまいました、私共が世の中を渡るには智慧がなくては駄目です、私共の身軀は極く小さい

ものであります。が神様から勉強家で辛棒づよく利口で用心深く、何を爲るにも心を合せて熱心に爲る様に作つていたとさましたから有難く思つて居ります。けれども何事も實際にやつて見なければ何の役にもなちません。今日は大層時間を費してすみません、若し私が今日皆さんに御話した事が少しでもあなたがたのお爲になりましたならば私は大變幸です」

と頭を下げてノコノコと戸の外に出て行きました。七八人の子供は蟻先生のお話を聞いて非常に悦びました。此の内には定吉と云ふ怠惰者や、長一と云ふ墮落者や、貫吉と云ふ厭つばい者や、梅太郎と云ふ少し馬鹿や、常一と云ふ喧嘩好等が居りましたから蟻先生の御話はたいへん益になりました。七八人の悪い子供に、教育を與へました、其れ故この七八人の子供はこの蟻先生の御話を聞いてから、たいへん變つたい、子供に成りました。

蟻先生の一場の御話が壓つばい者や怠惰者や、喧嘩好のいたづらな者を七八人

もよくしたとはなんとまあよい事ではありませんか。

第六十七 木の葉の蝶々

或る貧乏な田舎家に長太郎といふ子供が居りました、勿論貧乏人の事ですから、お父様もお母様も總がりで働らいて、微な暮しをして居たのであります。が、此の長太郎と云ふ子は至つて孝行者で、よく父母の手助を致して居りましたので、來内は誠に平安な、樂しげな聲にみち充ちて居りました、所が不孝にも或る日お母様は不圖した事から病氣になつて、一週間たつても一月たつても中々直る様子は見えません、其上家には一人の働き手が減つた譯ですから、生活の方もだん／＼困難になつて來て、お母様の藥は愚か三度の食事にもさしかへる様になりました、お母様思ひの長太郎、此頃の心配は并々ではありません、どうかして自分で何か働らいてお金をこしらへ、お母様の病氣を直して上

げたいと、それ計り朝晩祈つて居りました。

處が近所に蝶大先生と言はれて熱心に蝶の標本を集めて居る人がありました。この人は餘程同情の深い人と見え長太郎の話を聞いて大層氣の毒に思ひ、わざわざ長太郎の家に尋ねて来て、

先「若し珍らしい蝶々を持つて来て呉れれば、その蝶々の性質に依つて、相當の金を上げるから、どうです、一つ骨折つて呉れませんか」

と親切に申しました、長太郎は非常に喜んで厚く御禮を言ひ、「出来る丈珍らしいのを探がして見ませう」と約束致しました。

扱、善は急げと云ふので、長太郎は愛作と云ふ仲のよい友達と共に、直に蝶狩に出掛けました、この愛作は非常に情の厚い子供でありましたから、喜んで長太郎の働を助ける事を承諾したのです。やがて廣い野原に来て見ますと折しも春の暮で、色々の草花が咲き亂れて居ります間に、澤山の蝶々がさも樂

しげに飛び交ふて居ました、長太郎も愛作も、この美くしい景色に見惚れながら、思ひ思ひに蝶を採集して居りましたが、突然愛作は長太郎を呼び止めて、

長「長さんや、アレ彼所に奇らしいのが居るじやあないか」

と申しました、長太郎も願向いて愛作の指さす、方を見ますと、成程まだ見た事のない奇らしい蝶々が飛んで居ります。

長「ほんとに奇妙な蝶々だね、サア早く取らうじやあないか」

と二人は馳け寄つて取らうと致しますと、今迄飛んで居た蝶は一時に木の葉の間に見えなくなつてしまひました、そこで二人の眼をキョロツかせて頻りに木の邊をさがしましたが、どうしても解りません、愛作は尙方々を見廻しながら愛「不思議だ！ほんとに不思議だ、今迄あんなに居た者が、而も一匹も居

なくなるとは何と不思議な事だろう」

長「これでは必度僕等の見違だつたんだよ」

愛「いや、決してそんな事はない、僕は慥に見たんだもの」

長「だつていくら探しても居ないからしやうがないじやあないか」

愛作はまだ名残惜しげでありましたけれ共、せん方なく引返そうと致しましたら、又バーツと飛立ちやした、二人は喜んで、つかまへ様と致しますと、又先刻の通り影も形もなくなつてしまひました。

愛「何と云ふ不思議の蝶なんだらう、蝶の幽霊といふのは此奴の事じやあな

いかしら、併しこうなつた下は何様したつて取らないでをかない」

二人は又必死になつて探し初めました、すると長太郎は急に何か思ひついたと見えて、澤山小石を拾ひ集めて、木の葉の上にふりまきました、果然蝶はその石に驚いて、急に飛び立ちましたから、愛作はじつと蝶の様子を見凝めて、その止る所を見届けました、さて、斜静と近よつて、見つめて居た所を捉みましたら、それは間違なく先刻の蝶でありました、見れば先刻解らなかつたのも

無理はありません、宛然木の葉の通りに出来て居るんですもの。

二人は大喜びで直に蝶先生の家に持つて参りました、蝶先生はそれを見て非常に喜んで、大層子供等を讃めました、それも其筈です、蝶先生は何千匹と云ふ蝶を持つて居りましたが、其様なのは一匹も居ませんでしたから。蝶先生は子供に向ひまして。

蝶「これは木の葉の蝶と云つて、實に不思議な蝶々です、一寸見た所では全く木の葉と見分けがつきません、それから此羽をご覧なさい、縫箔をしたのより奇麗じやありませんか。又此の目は澤山の小さい目から出来て居て、若し一つ宛にすれば七萬三千の目を有つて居る譯だそうですこの舌を御覧なさい、随分長いでせう、丁度自分の身長位ありますね、又此の口を御覧なさい、毛が一杯生へて居るでせう、諸君は蝶々と云ふ物は只美しい許りで、毎日遊び廻つてる怠惰者と思ひになるかも知れませんが、

其れは大間違です、蝶々は非常な大役を盡して居ます、そして此長舌や、毛だらけの口は其役目を全うする道具であります」

愛「へエー、秋は今迄長い舌と云ふのは、饒舌の事だと聞いて居りましたが、それでは蝶々でもお饒舌するのですかね」

蝶先生はニヤ〜と笑つて。

先「蝶々の長舌は決して喋る為ではありません、その舌や口でもつて色々の花の花粉（雄蕊の上についでる黄色い粉）を取つて、他の花に持つて行つてやるのです、それは何の爲かと云ふと、花が散つてからよく實をならせる爲です、花に取つては蝶は實に大恩人と言ふべきであります」

愛「先生〜蝶々は感心な蟲ですわ、僕等も餘程奮發しないと蝶に負けますね」

先「そう〜蝶の學問をすると中々學ぶ所が多いのです、それからこの蝶

が木の葉の様な形をして居るのは、敵を防ぐ道具であつて、丁度私共が鐵砲を以て敵に備へるのと同じ事です、若し悪い蟲や、悪い獸が來てこの蝶を取ろうと致します時は、葉の上に止つて動きませんから、どうしても木の葉と見分ける事が出來ないのです」

長太郎は急に何か思ひ出して、

「蝶々は飼ひならす事が出来ませんかしら、この木の葉の蝶は置いて參りますが外のを頂いて行つて御母様を慰めたら御座いますか……」

先「出來ます共〜、現に英國で一人の婦人が小鳥の様に飼ひ馴らしたと云ふ例もありますから」

長太郎は十圓と云ふ大金を蝶先生からもらつて、七八匹の蝶を入れた籠を手にさげながら、喜んで家に歸りました、お母様の病氣も、長太郎の孝行の爲に間もなく全快つて、美しい蝶々は日々樂しげに家の中を飛びまわつて居りま

した、その後は近所の人々は長太郎の事を長太郎といはずに親孝行の蝶太郎と云ふ様になりました。

第六十八 たこのまくら

或る天氣のいゝ日に、政吉、勝太郎といふ二人の小供が、本牧といふ濱邊に遊びに参りました、本牧といふ所は横濱から少し離れた海岸で、景色はよく、砂が細かく、子供等の遊び場としてはよい處でも、二人は真白い砂の上に貝を集めたり、巖の間に蟹を追っかけたりして、長い春の日の傾くのも忘れて、夢中になつて遊んで居りましたが、政吉は急に岩の上から聲をかけて、

政「オイ、勝ちやん、勝ちやん、早く来て御覽よ、をかしい者が居るよ、」
と叫びました、勝太郎は馳足で政吉の側に参りまして、

勝「何だい、政ちゃん、あかしな物つて？」

政「あれ御覽よ、あれあれ」

勝太郎は政吉の指さす所を見ますと、なる程、をかしな形をした物が泳いで居ます。

政「子、あかしな物だろう、僕はあれは生きた人の手だろうと思ふよ、あれあれ動いて居る動いて居る……」

勝「馬鹿いひ給へ、人の手が唯一つ躰から離れて動く筈があるものか」

政「だつて、人の手の形をして居るじゃあないか、マア何しろ取つて見やう」と二人は氣味が悪いと思ひながらも、岩の間の溜水に追ひ込んで、手で捕まへ様と致しましたら、ヌル／＼と滑つて、どうしても取る事が出来ません、そこで、勝太郎は馳けて行つて貝を入れて置いた籠を持つて来て、漸くの事ですくひ取りました、さて獲物はまんまと手に入れましたが、どうしても何物か分りませぬのでお父様にさいて見やうと急いで家に歸りました、併し矢張り無効で

した、お父様に聞いても、お母様にきいても、又近傍の人に見せましても分明した事は少しも分りませんでしたから。

そこで二人はその翌日、學校に持つて行つて同級の者に見せますと、矢つ張りよく知つてる者が無いと見えて、魚だと見ふ者があれば、貝だと言ひはる者もあり、中には虫に相違ないと言ふ者まで出て来て、中々議論がまとまりません、果ては言ひ争ひになつて、氣の早い子供等は、もう喧嘩などを始めましたそこで、「やい喧嘩だ」と言ふので何百人の生徒はワイ〜言つて其周圍に集まつて其周圍に集まつて、學校中は大騒ぎになりました。先生等も何事ぞと飛んて来て見ますと、大勢の子供が何だか籠の中にある者をさして、「何貝だ」「何魚だ何虫だ」と大喧嘩をして居るので、何の事だかさつぱり分りません、そこでその中の重なる者と呼んで、故を聞きました所が、その火元は籠の中の人の手見た様な者に就ての議論でありましたので、先生も笑ひ出して。

「ハ、ハ、ハ、つまらない事て喧嘩をした者だ、併し、丁度いゝ機會だから、一つ此れに就て講話をしてやろう」

と、學校中の生徒を講堂に集つて、ニコ〜笑ひながら、先生はお話を初めました

「皆様、これは貝でも虫でもありません、一種の魚です」

と、籠を高く上げて其中の魚を子供等に見せますと、一人の子供は大聲に

「僕が勝つた、僕が勝つた、魚だ〜」

と叫びました、先生は之を制して言葉を續け。

「此魚ほど色々な名を有つて居る魚はありません、英國では之を「スタッフイツシ」と申しまして、星の様な形をして居る魚と言ふ意味なのです、日本では「ひとで」又は「たこのまくら」と申します、人の手の様な形をして居ります故、「人手」といふのは可笑しくはありませんが、「たこが枕する」

とは變な名ではありませんか、又此魚は非常に大食でありますから「歩ゆむ胃腑」とも申します、此中央にありますのが胃腑で、又同時に口の用をなすものであります、それからこれ此の四方いや五方に出て居るのが足であります。此足の先には、よくは見えませんが、二千許りの目がついて居ます、先にも申しました如く、此魚は驚く程大食な魚でありまして、どんな魚でも食ふ事では此「ひとで」にかなはないそうです、何しろ二千の眼で四方を、ヨロ／＼見まわして、餌さへあればすぐバクつくのですから、大食なのも無理はありません、身軀全體が皆食ふ爲の道具なのです、それが爲に牡蠣の如きは非常な害を被ります、それから此「ひとで」の牡蠣を食ふ有様がおかしい、先づ食べ様と思ふ牡蠣を抱きこんで、腹から胃腑を出し、それに吹ひ着いて血を吸ふのです、いくら固い殻があつても何にもなりません。

茲に面白いお話があります、或る日一人の漁夫が釣をして居りますと、どうした事か何度餌をつけても直に取られてしまいます、そこで漁夫も不審に思つて、じつと海の中を見つめて居りましたら「ひとで」が餌を横取して居る事が分かりました、漁師先生怒るまい事か、直に海の中に入つて此の魚を捕まへ、ギザ／＼に斷いて「ごまあ見ろ」と水中に投げ込んでしまいました、すると不思議です、まだ三時間もたない中に、その寸々に引さかれた「ひとで」は皆な足が生へて来て澤山の「ひとで」になつてしまひました、漁夫は又々大敗北を取つたのです、何とふへる力の盛んな魚ではありませんか。

此の魚はこの様に害のある魚ですから米國では年に何萬圓といふ大金をかけて、この魚の退治をとめて居ります、實に大食するのがこの魚の悪い所で、又疾病なのであります、人に嫌はれるのも、他の魚や貝を破すのも、唯その大食の仕様であります、私共も決して大食をしてはいけません、而も私等の

は人の爲なでく自分の爲に害があるのですから尙更氣をつけねばなりません、書生の内に頭が痛いと言つて苦しむ者は大抵大食の結果であります、大食ほど脳を痛めるものはないのです。

『ひとで』は此様に悪い魚ですが、唯一の威心な所があります、其れは外ではありません、身軀中がよく一致する事です一度、頭で命令した事は、軀でも、足でも目でも胃腑でも、一生懸命に働らいて、必ず、目的を達せねば止めません、私共の心が、悪い事をするなと申しました時に其命令に背いたり、よい事をしろと申しました時に、其命令に従がはなかつたりする事は、「ひとで」より遙に劣つた行ではありませんか、私共は「ひとで」の悪い所は始終警戒してその真似をしない様に努めると同時に、よい所は充分「ひとで」の教へを受けなければなりません」と先生は丁寧の説明致しましたから、皆ニコ／＼として聞いて居りました。

第六十九 海

戦

十一才位になるお秀といふ可憐い娘が柔しい聲で

秀「母様、日本海軍大勝利バルチック艦隊全滅、萬歳、萬歳というて多くの人が狂人の様になつて旗を携たり、提灯を携たりして喧いでいますが、バルチック艦隊全滅といふのは何の事なのですか」

と尋ねました、母は何だか悲しそうに、目に涙を浮べて申しますには

母「お前は未だ年を取らないから解らないでせう、明治三十七年二月の十日に朝鮮に仁川といふ港の外で戦があつてから、一年もかゝつて度々旅順口といふ港の外で戦があつて、今年の一月一日に旅順の落城と共に露西亞の東洋艦隊と申して、露西亞から日本の海や清國の海へ送つた軍艦は皆日本の軍艦に毀されてしまいました、そこで露西亞のほうでも、此れではいけ

ないといふので、自分の國の近くにある海、その名をバルチックと申します、それは――寒い所です、昨年の九月其の海を守つて居つた數多の軍艦を一つに集めて又々日本のほうへ送つて來ました、其の艦隊は九ヶ月もかゝつて日本の近くへ來ました、それが丁度今年の四月頃なので、それから日本の軍艦の目を盗んで對馬海峽を経て浦鹽斯徳と云ふ露西亞の港へ入つて、又々日本の軍艦と戦はうと思つて、五月二十七日對馬海峽へと進んで來ました、所が腕を鳴らして待つて居た日本の軍艦等は、バルチック艦隊と見るや否や、勢強く攻め押せて、終々二十二艘もあつた軍艦は滅茶々に、日本の軍艦の爲めに毀されてしまいました、その上敵の大將をまで生擒にしたとの事で、實に世界が始まつてから、こんな大海戦があつた事はなく、又このやうな大勝利のあつた事もまれなのであります。もう此でいくら露西亞が我慢強い國だといふても、もう致し方がありませんから降参

するでありませう』

とお秀によくわかるやうに海戦の話をしてやりました。

秀「母様、有難、それでバルチック艦隊全滅といふ事はよく解りました、此の海戦でさぞ多くの人が水に溺れたり、大砲の弾にあたりたりして死んでせうね、私は戦なんどは大嫌よ、昨日犬が電車に轢かれて血を流して死んで居るのを見ましたが、私は嫌になつて顔をかくして逃げて通りました、其の上多勢の人が死だと聞くと、身が震える様です、私は毎晩神様に早く戦の止むやうに祈つて居ります」

といふて居る時母は涙をポロリ／＼と流して居りましたのでお秀は

秀「母様なせ泣くの、人様は萬歳々々と云ふて嬉んで居るのに、如何かなされたの、母様はどこかおわるいの、」

と赤心をもつて心配そうに申しますので、母はお秀の顔をちつと見詰めながら、

自分の心を制する事が出来ないで、ワアと泣き伏しました。

秀「母様々々、如何なされたのですか、母様よ〜」

と可憐い小さな手を母の肩にのせて、母の顔をのぞき込みますと、母は涙を押拭ひお秀の手を固く握り詰め、

母「お前は何も知りませんが、お前のお父様は丁度十年前程前、お前の生れた時、日本と支那との海戦に……」

と云ふたばかりでまた泣きだしました。

秀「母様々々、それでは私のお父様は日本と支那との海戦でお死なされたのですか」

と云ふて母と共に泣きだしました。

母「お秀や、父様は美事に日本の爲めに戦死なされました、父様は良い基督信者でおいでなされましたから、少しでも死のを恐れず、それは〜美事

な最後をお果げなさいました、私は十年も昔の事を思ひ出して、クヨ

〜愚痴を鳴して泣くのではありませんが、つい此の間海軍兵學校を卒業しましたお前の兄さんの武ちゃんも日本の軍艦に乗つて居るから、またお前のお父様のやうに戦死するかと思ふて心配でなりませんから泣くのです」

秀「兄さんの武ちゃんも死だかも知れませんが〜」

母「まだ何の便もありませんが、敵の軍艦を二十二艘も毀したり分捕たりした位だから、確に日本の軍艦にも損害があつたに異ありません、而して武ちゃんも其の損害を受けた一人であるかも知れません、」

と二人は涙にくれて居りますと、入口に號外、號外、といふ聲に驚かされて、入口へ行つて號外を讀でみると、日本の軍艦が受けた損害は夢の様に少なくありませんが、今までに知れて居る死傷者の數は將校以下四百名とありました、母は四百名と聞いて少しは安堵の思をいたしました、お秀は年にも相似ず感心な

娘でありましたから。

秀「母様、世の中の中は私共が何程心配しても、何ともする事は出来ませ
ん、其の中でも人の命といふものは神様の御手の中にあるのですから、唯
何事も心配せずに神様に頼りキリスト様に信頼ひ外に安心の道はありませ
ん、武ちゃんも死だにした所で、必と日本の花を咲かせてお死なさつたに違
いありません、萬一にもお兄さんが此度の戦に。父様と同じやうな運命に
あいでなされたなれば、親子二人が天皇陛下の御爲め日本の國の爲に、神
の榮光を顯はして、お死なされたのですから、何よりの名譽であります、
生残りました私 は母様に孝を盡して、何なりとも致します、神様は一羽
の雀ですらお守になりますから、必ず生残つた私等は何にかして下さい
ます、母様あんまり心配しますと御病氣になるといけません、」
と親を思ふ愛らしい娘の心、母はお秀の言葉にはげまされて、涙をぬぐひ座を

正しくして、

母「そうとも〜親子二人までも國の爲めに戦死した家族は名譽であります、
決してもう心配しません、さあ母様は針仕事をしますから、お前は學校の
復習でもおしななう、」

と云ひながら、親思ひの娘をもつた程 幸な事はない、と口の中で獨言いふて
居りました。

二週間後にいよいよ武雄の戦死の確な報知がまいりました、其と一所に母に送
つて来た武雄よりの手紙に「敵も味方も参れる天國へお先に」とありました、
母に信仰深き娘の言葉を思ひ出して、涙の内に悦を顯はし、息子の戦死を名
譽といはし神様に感謝致しました、バルチック艦隊全滅の後 露國人民は日本
の眞の値を覺つて軍も止み目出度く平和になりました。

第七十 螢 行 列

東京の神田小學校の教師が螢先生とまで綽名せらるゝ程螢の事にくわしい原田と云ふ教師が、或日のこと高等科の三四年の生徒に向ひ。

先「私は今夜東京で有名な氷川へ螢狩に参りますから、どなたでもお父様のお許を得て、夕方六時までに私の宅へ來なされば皆さんを連れて行きますよう、來たい方は竹の先へ籠をつけて、紙の螢籠を持って螢を取る用意をしてお出でなさい、時間に遅れるといけませんよ、「時間は金である」と云ふ事は御存じでせう、必ず時間を間違てはいけません」

と申しさかせました、夜の六時になると五六十人の子供が、各手に長い竹を持ち、腰に螢籠をさげて脚絆わたらの勇ましい姿で参りました、螢先生が先に立て二人づつ列を爲して、氷川を指して進んで参りました、氷川へ着ましたとき

は月がありませんから眞の闇で螢にはおあつらい向きの天氣であります、それに少々雨模様の空あいですから尙ほくよいのです、氷川神社の下から猫股の近所は一面にダイヤモンドが天から降て來たように立派な光を放つて螢が飛んで居ります、草の中にも柳の枝にも鈴なりにキラ／＼光つて居て、或時は非常な光を放つかと思ふとまた薄く消えてしまいます、竹でもつて草でも木でもなでますと螢は怒た様に大きな光を出します、五六十人の子供は先生が「馳ける危険よ」と言ふのもかまわず、夢中になつて「あゝあゝ」と叫びながら何疋となく螢籠に入れて悦こんで居ります、其中でも常太郎と云ふなまいきな子は、自分の螢籠にいつばい入居るのを上にあけて徳三と云ふ子供に、

常「徳ちゃんこれ見たまへ、立派だろう、まるで螢のランプだ、何でも見えるよ、一寸來て見給へ君の顔のあばたの数でも勘定できるから、オイ徳ちゃん怒てはいかんよ、ランプの光よりは美しい、電氣のあかりよりは氣高

い、ほんとうに燈火の代になるな、僕は昔支那で晋の車平とか車胤とか云ふ人が貧乏で油を買ふ事が出来なかつたので、螢の火光で勉強したと云ふ事を書物で讀んで半信半疑で居つたが今始めて信する事が出来る、きつと此光で書物は讀めるだらう、そうすると螢でも馬鹿にならないな、人の爲めに燈になるんだから、これ見給へほんとに本でも讀めるよ」と談して居りますと、進と云ふ子供が、

進「常ちやんどうだい螢狩は愉快だね、

君は大變物知りだが螢がなせあんなに光るか知つて居るか」

常「知つて居るとも」

進「なぜか」

常「知つて居るとも」

進「なぜかよ」

常「ウーン」

進「馬鹿にしてるね、ウーンではわからんよ、なせ光るの」

常「僕は今夜急に無學になつた」

と云うて逃げ様と致しますから進は、

進「今むかふで螢先生が螢の講義をしてたのを聞いて居つたかね、螢には源氏螢と平家螢とあつて、日本の螢は源平に分れて居るんだそうだよ、この

氷川に居る螢は源氏螢で平家螢よりは餘程大きいそうだよ、

常「ウーンそうかな、すると螢も武士か」

進「馬鹿言ひ給へ、螢が武士なもんか」

常「だつて螢にも源平の姓がついてるではないか、士族の範圍もなかく廣

くなつて來たな、で螢は何して光のかい」

進「あの光るのは重もに女螢だそうだよ」

常「して見ると螢でも女の方が男より美しく光るのかね、女は人ばかりでなく何でも立派な者かね」

通「あの女猫が夜妙な聲で男猫を呼ぶ様に螢もあの光で男螢を呼ぶのださうだ」

常「始めて聞いたね、さすが螢先生だ」

通「君先に行かずに先生の側について行って先生のお話を聞くとなか／＼面白よ、長ちやんや、波ちやんや、岩ちやんは中々伶俐だ、先生の腰巾着になつて居るから、物知になるには先生の側に居るに限るよ、さあ行ろ」

と相談がさまりまして振返つて行かうとすると、直太郎と云ふ小供が「キー」と云ふ聲を出しましたから、何事かと怖て、常太郎も徳三も進もかけて行つて見ると直太郎はブル／＼ふるえながら「をい／＼これ見たまへ」と云ひますので、三人ともよく見ますと、成る程草の中に火の玉の様なものが動いて居りま

す、三人ともまた青くなつて「あー」と聲を出しましたので、後に居た七八人の小供が其聲を聞いて、何事かと思つてやつてきましたか、又驚いて「人だまよ人玉よ」と叫びました、そこで、先生を始め澤山の子供がやつて來て見ますと、なる程火の玉が草の中にあります、三四十人の子供が人玉だと思ふたのも尤であります、先生はいきなり草の中に入つて其火の玉をつかまへました、すると消るかと思つたのが却て、尙々恐ろしい光を放ちましたので小供たちは一層青くなりました、先生が其火の玉をつかまへて小供の前に持て参りますと、人玉でも何んでもなく大な蛙でありました、此蛙は草の中に居ても腹一杯に螢を呑み込みましたので、丁度螢籠に螢を澤山入れた様に、螢の光が蛙の皮からすきとをつて火の玉の様に光つたのです、先生は笑ながら、

先「皆さんこれは人玉ではありません、蛙が餘澤山螢を呑んだから光るのです、こればかりでなく幽霊とか狐火とか人玉とか云ふのは蛙が螢を呑ん

で飛ぶのを見て言ふのです、決してこわい事はありません、蛙の腹に入つた螢は皆さんの籠に入つた螢と同じ様に光のです、皆様も螢を吞むとお腹が光りますよ」

と先生が螢の事をよく話して聞かせますと一人の小供は大きな聲を出して、

小「先生々々、私の螢かごには螢が一杯はいりましたから、いまにこの籠が燃えはせぬかと思ひ、度々手をあて、みますけれども少しも熱くありません、ランプや蠟燭のわきに手をやるとたいへん熱いですが螢の火ばかりはなせあつくないのでしやう、

と問ひました、先生は笑いながら、

先「それは感心な質問です、光の内で螢の光ほど熱くないものはありません、がそれは何故だかまだ私にもわかりません」

と申しました夜も最早九時となりましたから先生は皆をつれて神田をさして、

歸りました、市中の小供は誰云ふとなく螢行列がきたくとさわぎましたので人が出て見ますと成程五六十人の小供が、各々螢か入れた籠を下げ、肩には竹を鐵砲の様にもつて居りました、ほんとは立派な螢行列でありました。

第七十一 薔薇づくしの御馳走

食一は意地の穢い子であります、朝から晩まで始終口を動かして、何か食べ居ります、ある日食一は新聞の廣告を見て居りましたが急に、

食「姉さん姉さん、今度「食道楽」とゆふ本が出るよ、僕は食道楽に僕ばかりだと思つて居たら、世界にも随分食道楽があると見えるね。」

と大聲で申しますと、僕は笑ひながら、

「食ちやん、そら毎日／＼食べる事ばかり考へて居ないで、少しは庭に出で、薔薇の花に水でもやつて御覧な、そうしないと前、身體を悪くするよ、

お前が頭が痛い〜と云ふのは大食の結果に相違ないんだから。」

「なんだつて？ 薔薇の花に水を遣れつて？ 何も食べる事の出来る花なら水を遣る氣にもならうが、薔薇の花と来てはいやなこつた、薔薇の花は美しい事は美しくしいが、あの刺のあるのが氣に食はない、花を取ろうとするにあの刺の奴が邪魔をしゃがる、どうしてあんな美しい花に刺があるのかしらん、姉あんは毎日〜本を澤山讀んで居るから、その理由を知つて居るでせう？」

と申しますと姉は

姉「私は物知者ではないが、古い本を讀んで色々薔薇の話を見ました。」

食「それでは姉さん話して頂戴な、併し僕には何か食べ物の話でなければ、旨くも面白くも何ともないよ。」

姉「マア食ちやんは何處まで意地が穢ないんだらうねへ、マア薔薇の話をし

ませう、昔コリンスと云ふ町に其れは〜美しくしいお姫様がりましたが、餘り美しくしいお方だもんだから、三人の戀人が附き纏うて、このお姫様の取り合ひをしやうとしました。」

食「へー、其れでは其お姫様は餘程美しくしい人だつたんだらうね、日本で云ふと小野小町といふ様うなのだね姉さんも美しくしいから四人位の戀人があるだらう。」

姉「あら、いやな食ちやんだね、そんな冗談を言ふともう話してやらないよ。」

食「お姫様は三人共皆嫌だつたの。」

食「ナル程それでは尙も困りになつたらう。」

姉「三人が餘りしつこく来るもんだから、お姫様は家臣をつれて、家から逃

げて御出でになりました、すると、三人が三人共門口に待伏をして居て、お姫様を追跡けましたの。』

食「それはお姫様もお困りであつたらうね。』

姉「お姫様は一生懸命にお逃げになつたが何しろ繊弱い女の事、先方は夫丈夫な男の事だからとても逃げられるものではありません。』

食「おやお姫様はつかまへられたね、氣の毒に……。』

姉「幸に目の前にアポロと云ふ神とダイアナと云ふ神とを祭つた宮があつたので、それに飛びこんで、其神々にお助をお願になつたのです。』

食「あゝ、それで僕も安心した、そうしてお姫様は?』

姉「神様は直にお助けにならうとしましたが、何しろ外には三人の屈強男が待つて居るのだから仕方なく其お姫様を薔薇の花にしておしまひになりました。』

食「それで薔薇の花があの方に美しくしい理由が解つた、して三人の男は失望したらうな。』

姉「三人の男はお姫様が薔薇の花になつたのを見て自分等も神様に願つた、一人は苔に、一人は甲蟲に、一人は蝶にして戴きて毎日其薔薇の傍を離れなかつたそうです。』

食「それは尤もの願望で三人も満足したでせうが、併しお姫様に副てきた家來は如何なつたらう、まさか自分一人で歸る譯にも行くまい。』

姉「そうとも、家臣も神様に願つて刺にして戴いて、お姫様の番人になつたと云ふ事です。』

食「成程これは面白い、お姫様は美しい薔薇になり、家來は刺になつてお姫様を保護するとは、中々面白い、それであの美しい薔薇の花に刺があるのだナ、成程……併し僕は御馳走の話が聞きたい。』

と迫りましたので、姉も仕様がなく、薔薇づくしの御馳走の話を初めました。

姉「薔薇といふ花は昔から喜の印で、どの祝の席でもこの薔薇のない事はありません、婚姻の時などには必ず此の花を用ゐます、花の中ではこの薔薇を女王と申します、昔子ローと云ふ羅馬の大帝は、或時數千人のお客を招いて、大層な御馳走をなさいましたが、其時の御馳走は薔薇づくしでありました、まづ庭には噴水の池を造り、其の水は薔薇の香水に致しました、座敷の敷物も薔薇の花です、机の上には薔薇の酒と薔薇の菓子か山の様に積んでありました、又食後には薔薇の御湯に入り、實に何から何まで薔薇づくしでありました。」

食一は大喜悦、ニコ／＼しながら

食「姉さん、僕は愉快でたまらん、唯聞くだけでも此様に愉快なんだから、

客人は嘸大満足であつたらうね。」

姉「處がね、それが大差違で、その宴會に招かれた者は皆俗に云ふ、「薔薇風」といふ病氣にかゝり、死んだ人も澤山あつたさうです。」

食「それは驚いた、薔薇の御馳走で死人を出すなんて……。」

姉は容を正しくして、弟の食一に向ひ、

姉「ねえ食一さん、大酒と大食は身を亡す基であります、食事とても度を過すと、病氣になります、どうしても私共は神様の御助を乞ひ、食べ度いと思ふても自からを制するといふ事をしなくてはいけません、幾程薔薇の花の様なよい花でも、度を過すと毒になります、お前もそう食べる事許りに熱中しないで、少しは自然の美を愛する様にならなくてはいけません、花程私共は神様の御性質を顯はす者はありません。」

姉は真心からの愛心を以て、なき母になり代つた心で弟を誡めましたので、流石の食一も母に諫められる心地で、愛の化身かと疑はる、姉の顔をじつと見

つめながら、

食「姉さん、僕は今日といふ今日は眞實に心を改めました、僕はお母様がな
くなられてから、學校で悪い友達の感化をうけて、こんな食道樂になつた
んですが、考へて見れば實に馬鹿な事でした、姉さんの仰しやる通り、私
の頭の悪いのも、全く大食の結果なのです、けれ共最早決心致しました、
私は斷然この悪い癖をすて、神様に願つて自制心を養ひます。」
と固く誓ひました。

食一は此の時から、悪い友達とは凡て縁を切つて、生れ代つた様なよい子供
になりました。

第七十二 感心な孤兒

東京小石川區にある東京養育院は、一ヶ月の中に急に孤兒が五十人も増しま

した。其の五十人の孤兒は、重に福島縣宮城縣から來た孤兒でありました。其
の内にお春と云ふ九つ位の女の孤兒は、實に可愛いらしい孤兒であります、お
春の家は可成な百姓でありましたが、昨年の大饑饉で両親は可愛いお春を助け
る爲めに、自分達は食べる物も食はずに、反つて死んだのであります。お春
は何時も笑顔をして居て何となく崇高い娘でありました。仙臺地方の娘であり
ますから、言葉使ひは「ずゞ」と云つて少しも解りませんが、其の解らぬ言葉
を聞くのが、又一しその愛嬌でありました。

「お春さん何才」

と聞きますと、何だか口の中で「ずゞ」と申しますから、皆んなが其の云ふの
を笑ひますけれ共、お春は少しも氣にはかけず自分も人と一緒に笑つて居りま
す、實にお春には一種云ふに云はれぬよい性質がありました。お春が來てから
東京養育院は實に春の様に陽氣になつたと申します。泣いて居る小供があれば

お春は必ず其の傍に行き、「お泣きでないよ」と云つて懐から鼻紙を出して涙を拭いてやり、喧嘩をする小供があれば自分が必然間に入つて仲を好くしてやります、つい二三日前に次郎と云ふ十二三才の悪戯の小供が、大きなステッキを振りあげ、作太郎と云ふ腕白小僧をた、かうとして、鬼の様な顔をし乍ら逃つかけて行きますと、作太郎も負けぬ氣になり、大きな棒を振りあげ今にも大騒動になる處でありましたが、お春は其を見急いで二人の中に入り、

春「次郎さん、危ないからおよしなさい、」

次「作太郎の奴が僕の持つてた菓子を取つて返せと云つても返さないから、

今是でなくつてやるのだよ」

と云つて大きなステッキをふりかけますと、作太郎は

作「次郎の奴は昨日僕の持つてる果物を取つて僕に明日菓子をやると云ふたから、僕が取つたのだ、其れを僕をなぐるなどと云ふから僕も黙つて居

ないのだ」

と云つて二人とも大聲を出して今にもたたき初めそうです、お春は又いつもの優しい聲で二人をなだめ、自分の袂にある菓子を取出して作太郎に、果物を次郎にやりますと、今更で二人の手にあつた帽は自然に地に落ちて終ひ、急に二人ともニコニコと笑つて次郎も作太郎も大きな口を開いて甘そうに食べ乍ら、お春に禮を云ふて彼方に行つて終ひました。

或る日一人の教師が參觀に來られて、教場に百人計りの孤兒を集も色々よい御話をなされた後、孤兒に對ひ、

教師「皆さん、父さんのある御方は手を舉げて御覽なさい」

と云ひました。孤兒は互に顔を見合せ、此の先生は僕等が孤兒だと云ふ事を知らないのか知らん。孤兒でなくば孤兒院に來る筈はないのにと云はぬ計りの顔をして居りますと、其の百人の内からお春が可愛らしい手をさし上げました。

皆みなの孤こ兒じは驚おどろいて春はるの顔かほを一いっしょ緒じゆに見みました。ある孤こ兒じは、春はるちゃんは孤こ兒じでないのに孤こ兒じ院いんに來きたのだなと思おもつて居をりました、教師けうしは

教師けうし「あゝ父ちちさんのある子こ供どもが獨ひとりありませぬ、モ一は外はにはありませぬか」

と聞ききますけれ共ども、一ひと人りとしてあると云いふ者ものがありませぬでした。先生せんせいは言葉ことばを續つけ

教師けうし「お春はるさん、あなたの父ちちさんは饑う饑いの爲ために死しんだのではありませぬか」

と云いひますと、お春はるは星ほしの樣やうな可かわ愛いらしい眼めから涙なみだをホロリ／＼と、流ながし乍なら

春はる「はい、私わたくしの父ちちさんもお母かあさんも私わたくしの爲ために御お亡なりになりましたが、

其その外ほかにモ一ひと人り父ちちさんがあります」

と答こたへましたので孤こ兒じ院いんの者ものは尙なほ驚おどろきました、先生せんせいはお春はるに向むかひ

教師けうし「お春はるさん、そのモ一ひと人りの父ちちさんは誰たれでありますか」

と問とひました。

春はる「天てんの神かみ様さまは、私わたくしの父ちちさんであります、私わたくしの内うちの父ちちさんは御お死な去なりになり

ました、天てんの父ちち様さまが此この孤こ兒じ院いんで三さん度どの御お飯はんを食たべさして下くださいます、

私わたくしは天てんの御お父ちち様さまがありますから嬉うれしくあります」

と答こたへましたので、孤こ兒じ等らは何なに故ゆゑお春はるは何いつ時ときでも嬉うれしくあるか、何なに故ゆゑあんなに親しん切せつであるかを悟さとりました。

或ある日ひ一ひと人りの盲めくら目めの物もの貫ぬひが、穢きたない着き物ものを着きて孤こ兒じ院いんに參まゐりまして、一いっ杯ぱいの御お膳ぜんを呉くれと申まをしました、孤こ兒じ達らは孤こ兒じ院いんに物もの貫ぬひが來きたのは此こ度どが初はじめてですから、皆みなな穢きたないと云いつて嫌いやがりました。此この孤こ兒じ院いんの食しょく堂どうにはいつも一いつ空あ席せきがありました、孤こ兒じたちは誰たれが茲こゝで食たべるのか少すこしも知しりませぬでした、年ねん中ちゆう誰たれも坐すつた事ことはありませぬ、其それだのに御お膳ぜんがちやんとあつて誰たれか來きて食たべる樣やうになつて居をりました、先せん生せい達らは孤こ兒じたちにあの席せきは神かみ様さまの席せきだと云いひ聞きかして居をりましたが、子こ供ども達らは神かみ様さまが如どうして私わたくし共ども一いっ緒しょに御お膳ぜんを食ありな

さるのか、又何時神様が来て御食りなさるのか疑がつて居りました。お春は盲人の物貰ひを見ますと、直ぐいつもの様に親切に其の傍に行き

春「叔父さん、御膳が欲しのですか」

盲人「ハイ、私 は此の二三日御膳と云ふ御膳を食べた事ありませんから、何卒一杯御膳をいたゞかせてやつて下さい」

春「私の父さんも母さんも、饑饉の爲めに御飯が食べられなくて御なくならなさつたのですから、お腹の空くと云ふ事は如何なに辛い事であるか知つて居ります、サアこちらへ」

と云ふて穢ない盲人の手を引いてやりますと盲人は

盲人「私にも一人の娘がありました、今何處に居るのか解りません、今あなたの優しい手に觸れて娘にさはる様な心持が致します」

と云ひ涙をこぼし乍らお春の手に引かれて孤兒院の食堂に入りました、丁度其

の時は午の十二時で皆んな御膳を食べ初め様として居る處でした。お春は先生に向ひ申しますには。

春「今日は神様が御出でになつて神様の御席で御膳をお食りになる事が出来ませんから、今神様の代人にこの御方をお送りにになりました」

先生は是を聞いてニコ／＼と笑ひ乍ら

先生「且れでは神様の御席におつれ申して澤山御膳をあげて下さい」と申しました、お春は其の盲目の物貰ひを神様の席に坐らせましたので、孤兒たちは今日初めて神様の御席と云ふのは、困つた者を助ける處であると云ふ事を知りました。

第七十三 蜂の女王

明日の命も覺策なき大病の爲に悴憔悴果て、見る影もないお母様の寢床の傍

に可愛らしい男の子二人と、溫柔そうな三人の女の子とが、泣きながらじつと母の面を見つめて居ります、母の苦しうに目を開いて、玉の様な涙を流しながら、

「お母様はもう到底助かる見込はないが、お前等は私のなくなつた後にも、よくお父様にお使へ申して、ほんとによい子供になつて下さい、これがお母様の最後の願ひです、お母様は前に天國に参りますから、どうぞ、よい人になつて後から天國に来て下さい。」

と申しますと、子供等は一層悲しくなつて、皆聲を出して泣き叫びました、すると不思議にも、庭の木の間に同じ様な聲で泣く者があります、母は大病ながらも其聲を聞きつけて、

「あ、何處かの赤子が庭前にないて居る様だ、マア可憐そうに……」と仰つしやいましたので、年上の二人の娘は、跣足で飛び出して、庭中の木の

間を探しましたが、赤子は愚か、人らしい者も居りません、二人は「はて奇妙だ」と尙方々を探ねて見ますと、又向ふの方から赤子の泣聲が聞えました、二人はその聲を辿つて行つて見ました所がこれは何様した事か、何千匹といふ蜂が赤子の様な聲を出して泣いて居るのでありました、これは俗に蜂の女王と申します母蜂が死にましたのを、子蜂が悲しんで泣いて居るのです、その有様を見て二人の娘は又急にこみ上げて来て、ウンウンと泣きながら、お母様の傍に返つて来て、

「お母様、あれは赤坊の泣聲ではありません、蜂がお母様を失くした爲にあつて泣いて居るのです。」

と申しました。お母様は之を聞きまして、

「あ、蟲ですら母を失なへばあんなに悲しがるんだから、私が死んだら子供等はどんなに泣くだろう、あ、可愛そうに……」

と自分の身の苦しさを忘れて、唯子供の事を思ひめぐらし、熱き涙に暮れました。これが親の情です、暫くして母は首を上げて、此世の名残にもと、蜂のお話を致しました。

「蜂の様な虫にも母子の厚い愛情があります、それ故、一匹の母蜂の死んだ時は何千匹の蜂がああやうに聲をそろへて泣き叫ぶのです、扱、蜂には三つの種類があります、第一のが女王蜂と云つても母蜂の蜂です次は貴族又は華族とか云ふ蜂で、其次は平民の蜂であります、奇體な事には貴族の蜂は大の懶惰漢で、朝から晩まで女王の傍に侍つて、ぶら／＼と遊んで居るばかり、何一つ働らいた事はありません、一寸人間の華族に似て居るではありませんか、平民蜂はそれと正反對で、終日、休みなく働らいて、花を探つて蜜を集めたり、巢を造つて女王を保護したりして、それは／＼働きの者です、何しろ此平民蜂が居なかつたら、蜂の世界は一日も永生へる事が

出来ないのですから、女王は非常に平民蜂を大事に思つて居ます、その内に青葉の夏を過ぎさつて、霜が草や木を白く色どる時分になりますと、その勉強な平民蜂は何匹ともなく集まつて来て、華族の蜂を皆殺してしまひます、其残酷な事といつたら、目もあてられませんが、併しよく考へて見ると、蜂でも人間でも、役に立たない懶惰者が、酷殺されるのは當り前の事でありませう、お前等も平民蜂の様によく働らいて決して華族蜂の様な、懶惰者になつてはなりません、働かずに樂をする事は出来ません、働くのは人が神様から授つた、最も大なる義務であります、御覽なさい内のお父様が、人から豪いといはれるのは全く子供の時からよく働きになつた結果ではありませんか。

蜂は尻に劍を持つて居ます、併し只一匹離れて居る時には、誠に弱い者で、何の力もありません、お前等は毛利元就が矢を以て子供等を教へた話

を、知つて居るでせう、物は何でも一所になつて居れば強いものであります、お前等も、兄弟五人が互に相助け、相救つて、苦しい時にも困難な時にも共に心を一にして働らくならば、必度大なる事業をなす事が出来ませう、決して兄弟喧嘩なんかしてはいけません。

又蜂が人をさすと云ふのは、決して自ら好んでするものではありません、子供等が棒で突ついたり、威かしたりするものですから、止むを得ずです、全く正當防禦の爲です、お前等も決して人を打つたり、傷つけたりしてはなりません、キリストは敵をすら愛せよと仰しやつたではありませんか、正義の爲なら防禦的に戦ふ事を、神様はお許しになります、唯利己心の爲、人を傷つける爲に戦争をする事は、決してお許しになりません、お前等はこの蜂の話の聞いて、此の三つの事を忘れてはいけません、即ち働と一致と正義との三箇條を覚えて居なければなりません、其他蜂

に就いては、まだ面白い事が澤山ありますが、お母様はもう苦しくつてたまらないから、もう止めますが、何卒この三つの事を覚えて居て下さい。と言つてさも苦しそくに口をつばみました、五人の子供はこの有様を見てさも心配らしく

「お母様！お母様！！」

と聲を合せて呼びましたが、母は一寸首を動かしたきり、口をさへそうにも致しません、子供等は愈々悲しくなつて

「お母様！お母様！何卒氣を儲にして居て下さい。」

と申しますと、母は僅に目を開いて、嬉しそくに、而も安心した面持で子供等を見つめましたが、間もなく又目を閉ぢて安々と天國の旅路に向はれました。子供等は母の骸に取縋つて、暫く涙に呉れました。噫、この時の子供等の心の中はどれ程悲しかつたでしやうか。

外には又母を失ふた蜂の泣聲が、一入悲しげに聞えて居ます、嗚呼、世の中にこれ程哀れな景色はありません。

五人の子供は母が最後の話を、片時も忘れる事は出来ませんでした、いやでいやで仕様がなない仕事も、お母様の話を思ひ出しては、精出して致しました、兄弟の間に恨事や、争の起りました時には、又母の話を思ひ出してすぐ仲直りを致しました、友達の不禮を怒つて、思ふ存分なぐつてやろうと思つた時にも、不圖起る母の最後の誠によつて、振り上げた拳固を下しました、此の様にして、五人の兄弟は、皆豪い人になつて、又一層仲のよい兄弟になりました、これは實にお母様の最後の話を覚えてよくそれを實行つたお蔭です。

第七十四 たった林檎一ツ

牛込南町の立派な門構の入口に、材木が山の様に積み上げてある真中で、

大工が一生懸命に汗を流しながら、鋸でコツ／＼拍いて居りました、すると五ツ六ツの御嬢様が立派な着物を着て、下女の手を導かれて、門口へお出でになり、優しい聲で下女に

嬢「おや、お竹や材木が一杯で家に這入れないわ」

と申しますと、下女も同じ様に

下「左様で御座います、私も御嬢様を抱いては、此の高い材木の上を越す事は出来ません」

と云ふのを大工は耳にしましたから、すぐ拍いて居つた鋸を下に置いて、ニコ／＼と笑ひながら

大「御嬢様、私がお抱申して、御家に入れてあげませう」といふて其の可愛い御嬢様を大きな手で高く抱き上げて、無事に御家に入れてあげました、すると御嬢様は笑ひながら。

嬢「ありがとう」

といふて奥の方へお這入りになりました不思議にも此の大工は度々お嬢様を見送りながら、何だか嬉しい様なまた悲しい様な様子を致しました、お嬢様は奥へ這入り、丁寧に頭を下げ、

嬢「お母様、唯今

といふのを見て、母は嬉しさに、

母「よく早く歸つて來ましたねえ、淺草へ行つて面白かつたでせう」と聞きますとお嬢様は其の答をせずに、いきなり

嬢「お母様、私あの大工は大好よ」

といひますから母は何だか少しも解りません、

母「大工さんが何かしたかへ」

嬢「えー私家が家へ這入らうと思ひましたら、入口に材木が一杯あつて、這

入る事が出来なかつたから、私を抱いて家に入れてくれましたよ、私大工さんに何かあげたいのよ」

といひますから母も娘の優しい言葉を聞き大層悦びまして、

母「何でもお前の好きなものをあげなさい」

と申しました。娘は切に、何を與らうかと考へて居りましたが、こゝに二三日前に伯父さんから戴いた大きな林檎を大切に、食べたいのも食べずに、藏つて置いたのがありましたのを取り出して、

嬢「お母様、私 は是れを與ります」

といふて小さな手で大きな林檎を持ち、お母様と一緒に玄關に行き、大工を召んで、其の林檎を與りました、大工は可愛い御嬢様の手から、此の林檎をもらひ、頭を低く下けて戴きながら。

大「有難う御座います」

と度々御禮を申しますと、御嬢様は、

嬢「お禮をいはずに早くお喰り」

と申しました。すると不思議にも大工は目に涙を浮かべながら、

大「どうして〜私 は此の林檎を喰ひません、此の林檎は家に歸りまして娘に喰べさせます、娘も此の様に大きな林檎を戴いて、さぞ悦ぶで御座いませう、私の娘は此の様な立派な林檎を見た事もなければ、まして喰べた事も御座いません、私の娘は「花」と申して、今年で八才になります、母は娘が三才の時に、家出してしまいました、其の後は私獨りで育て、居りました、可愛そうに五ツの時に……私の過失から足に大きな怪我をさせまして、可愛い娘を跛者にいたしてしまいました、然し私の娘は感心な娘で御座います、まだ年もいかにぬのは、跛足引ながら台所の世話をしてくれたり、又家の留守番をよくしてくれます、此の林檎を持つ

て歸つたら、娘は神様からの贈物と思ひ、必ず悦ぶであります、先程も可愛いお嬢様をお抱きまうして、自分の娘の事を思ひ出し、嬉しいやうな悲しいやうな、何ともいはれぬ心持が致しました」

と悲しげに申しましたので、母も娘も共に涙を流しました、大工は日の暮れるまでコツ／＼拍いて居りましたが、夕方に辨當箱と一緒に林檎を包んで家の娘を悦ばせてやらうと、常よりは早歩で家に歸りました、お花は親が持つて来てくれた林檎を見て大變に悦びました、其れも其の筈です、生れてから未だ此の様な大きな立派な林檎を見た事はありませんでしたから。お花は喰もせず、毎日入口の二疊敷の室にある、机の上に載せて、此れは神様から私へ下さつた贈物ですから、大切にせねばならぬと思ひ、後生大切にして居りました、此の娘にとつて此の林檎は大金をもらつたよりも嬉しくありました、お花の家の先み隣に居る梅吉といふ子供は、仕様のない悪戯な小僧で、いつもお花の家の入

口に来て、此の娘に喧嘩い、お花の跛足を引く相似をして、毎日の様に、跛足娘くといふて、可憐にまだ入つにもならない娘を馬鹿にして居りました、世間に梅吉の様な悪戯な小僧の多く居るには誠に困ります、お花は跛足くといはれても少しも争ふ事をせず、常もやさしく、梅吉と喧嘩をする様な事は一度もありませんでした、梅吉は常も同様に、お花の家の入口に参りますと、立派な大ききは林檎が机の上に置いてありました、梅吉は其の林檎を見て驚きました、

梅「おやお花ちゃん、立派な林檎だねえ、跛足の娘が喰べるには良過ぎるよ、一と馬鹿にしました、何處までも梅吉は悪い子供であります、んな事を云はれたら他の娘ならば喧嘩をするに違はありませんが、然しお花は口曜學校で聞いた、「敵を愛せよ」悪に酬ゆるに善を以てせよ」といふ事を決して忘れませんでした。お花は黙つて机の上にある林檎を取り上げました。梅吉は其を見て、あ

「お花はあの林檎を己に盗られるかと思ふて匿すのだなと思ふて居りました、するとお花は跛足を引きながら、入口まで来て、その立派な林檎を梅吉に與りました、梅吉は其の林檎を持つた時には大きな鐵砲の彈丸がドンと胸に當つた様な心持がいたしました、梅吉はその大きな林檎を見ながら、あゝ己れは悪い子供であつた、跛足くといふてよくも可愛いお花さんを苛めたもんだ、僕の様な悪戯な、仕様のない子供を、お花ちゃんは愛してくれる、あゝ己れは悪い子供であつた、と感じましています、での自分が悪かつた事を謝りました。そして無理に其の林檎を返へそうと致しましたが、お花はどうしても取りません、そこで梅吉は其の林檎を二つに切り、お花と一緒に悦ばしそうに喰べました、先程から此の有様を見て居つたお花の母は涙を流しながら、

母「あ、私の短氣で家出をしたのは悪かつた。例へ夫が悪いからとはいへ、家出をしたのは妾が悪かつた」

と終に家に歸る様になりました、お花は此の林檎は確かに神様からの御贈物であるといふ事を信じました、たつた一つの林檎でも大變なよい事を致します。

第七十五 花の時計

房「由ちやんく、僕の朋友の永井が昨日米國から歸つてきたから、僕は横濱まで迎へに行つたがね、永井はなか〜物知りになつて歸つて来たよ、なんでも金があるなら旅行をするにかぎるね、僕も大學でも卒業したら金を貯めて世界に飛び出すつもりだ、然し僕は今十四才だから尋常中學を終へて高等中學から大學を卒業するまでには、満足にいつてもまだ十年かゝるんだ、あゝ先が永いねえ。」

由「房ちゃん永井がなにか面白い話をしたか。」

房「ウン、花の時計のお話をしたよ。」

由「花の時計……花の時計とは何だ。」

房「セント、ルイスの萬國博覽會の農業館の入口で、ぐるつと廻ると二町もある土手に其れは〜立派な花が一杯時計の形に植着けてあつて、其の花の上に針が動いて時を知らせるやうな仕組になつて居るんだそうだ。」

由「それは見物だろう、然し地の下に時計を据着けて、機械仕懸にしなくても、花といふものは花自身が時計だそうだね。」

房「一體それは如何いふ理かい。」

由「春がくればさつと莖が咲き初めて、又蓮の花などは朝何時とちやんと時を定めて咲、上野の蓮池へ行つて見たまへ、何人ともなく其の花のさくのを見にいって居る、實に花位時をよく守るものはない、時がくれば咲き、時が来れば凋れる、「時は金だ」といふ金言があるが實によくいつたものだ、實際に時は金だよ、人は金は大切にすが、時を無益にするのは何とも思

はない僕にはどうしても其わけが解らない、昔から時を守らない人が、豪
い人や金満家になつた例はいからね。』

由『君のいふ通りだ、時ほど大切なものはない、時を大切に思はないものに
は困るよ、僕の同級生の繁君はいつも、満足に時間に學校へ来た事は
ない、いつでも保證人の印附で遅刻届を持ってやつて来る、實に奇妙な男だ
よ、時を守らないから學問も出来ないのも當然さ、いつでも末席に坐つて
居る、然し僕は如何かして繁君をよくしてやろうと思ふて實際て居るが、
いつでも約束した時に僕の所へ来た事はない僕は明日午後五時に永井を
迎んで歡迎會を開くつもりだ、繁君も招いて置いた、然し必と五時までに
はやつて来まいよ、君も午後五時までに来てくれたまへ共に會食をしや
う。』

と由と房との二人は學校の教場へ入つて行きましたすると、繁はいつもの如

く五分も遅れてやつて來ました、學校では誰一人として繁と呼ぶものはなく、
皆「くれ」と字をして居りました、其の時の先生の講義は修身でありまして而
も適當な「時間」といふ題でありました、先生は聲高く「諸君今まで時は金だ
といふて居りましたが、いや時は金位の値ではありません、時は生命でありま
す、日は小さな時間からなつて居ります、セクスピアと云ふ英國の大詩人は
「私が若い時に時を無益にしたものだから、年を取つた今時が私を無益に
して居る」といひました、なんと面白い言葉ではありませんか、エヒウ、ホ
ルリイトといふ人は鍛冶屋でありましたが、鍛冶屋をしながら四十ヶ國を言葉
を勉強して其の言葉を話せるやうになりました。僅だと思ふ時間でも利用すれ
ば豪ものになることができます、時間の大切な事を悟つたものは決して時や約
束を破つたり、又時を無益にしてはいけません。

と申しました時に先生は繁の顔をにらんで居りました、これは繁にはよい藥で

ありました、然かしどんなよい薬でも其れを飲まなくては結果ないやうに、どんなに良い話でも其の話を實行しなくては何の益にも達しません。

次の日の午後五時には十四五人の青年が田井由太郎の家に顔を揃へて永井君を取巻いて、米國の面白い話をして居りました、然し十分過ても例の「をくれ」いや繁君はやつてまいりません、五時半に會集は共に食事を始めましたが、まだ繁君は來ません、そこで皆はもう來ないのだらうと思つて居ましたら會食を終つた時分になつて繁君はやつてまゐりました、

『諸君、僕は遅刻して失敬。』

と大きな頭を下げますと、誰初めるとなくクス／＼と十四五人集まつて居た青年は一度に笑ひ出しました、由太郎は笑ひもせずいかにも繁君を愛して居るといふ風を表はして

由「繁君實は君をまつて居ましたが、時間が待つ事が不可能といふ催促にや

むを得ず會食を終りました。』

と申しました、繁は時間を守らなかつた爲めに永井君の面白い有益な話を聞く事も出來ず、又折角由ちゃんが意用して置た食事にも列なる事が出來ませんで、非常に失望の有様でありました、然し繁は昨日先生が御話になつたセキスピヤの言葉を思ひ出して、嗚呼成程僕が時を無益にしたものだから、今時が僕を無益にして居る、よい、米國談も聞けず、又よい御馳走を喰べる事も出來ず、實に時は僕を馬鹿にして居るな、これも誰もとがめるではなく、唯僕がわるいのだと深く自分の罪をくい神様に謝りました、其の時庭に立派に咲いて居りました花はもう歸る時だといはぬばかりに花瓣を凋らせました、上野の鐘がゴ／＼と七時を報じて居ます、

繁はこの日から全く別の人間になりました、學校には決して遅刻しないし、學問もよく出来るやうになりましたその變化には先生も友達も驚いた位です、

或日の事繁は五六人の友達と一緒に、學校の行きがけに砲兵工廠の横を通りま
した、すると道傍に人が黒山の様に立つて居りましたので、子供等は

「何だ〜」

と云つて人の間をかき分けて見やうと致しました、繁はそれを見て、

繁「オイ、君等君等！ 學校に遅刻れるといけないから止したまへ。」

と申しますと、友達は、

友「何大丈夫だ。」

繁「モ一十分しかないせ、十分では餘程急がなくては間に合はないのに、道
草をして居たらとても間に合ひはしないよ。」

友「何、少し位遅れたつて關やあしないよ、サア君ッ一聖人ぶらないで、見
て行き給へ、やあ、喧嘩だ〜。」

と友達は繁の言ふ事を聴かないばかりでなく、繁迄も遅刻させ様と致しますの

で、繁もせん方なく一人で學校に参りました、繁が丁度學校の門をくぐりました
時に、突然非常な音が砲兵工廠の方に聞えました、雷汞が爆發したのです、そ
の爲に先刻繁の言ふ事をきかなかつた、友達の中の二人は、店の二階から壊れて
落ちて来たガラスの破片の爲に、頭に怪我を致しました、併し繁は、道草をし
なかつたお陰で少しの怪我も受けませんでした。

第七十六 蛇 使 ひ

五六人の可愛らしひ女の子が、綺麗な庭の芝の上で、嬉しそうに駆けくらや
鬼事をしたり、又は目隠しをしたりして遊んで居りますと、お愛と云ふ女の子
が、不意に「キヤア」と大きな聲を出しました。一緒に居る娘等は驚いてお
愛の側に行き「お愛さん如何して？」と尋ねますと。

お愛はまだ青い顔をして、

「あゝ恐怖つた、私の一癖嫌らいなものが、向ふの山の下からニユーと頭を出したのー」と答へました。外の娘は其を聞いて。

「其は蛇でせう」と云つて皆んな馳け出して家の方に行つて終ひました。

家に入つてもまだ蛇の噂です

「蛇程嫌いな物は私無くつてよ、見た計りでもゾツとするのですもの——」

私兄さんに聞きました、蛇の中で一番恐しい毒のあるのは「コブラ」

と云ふのですつて、それから角の生へてるのもあります、其がアダムエバを罪に落したのですつて、此様話等して居りますと、下女が参りまして、

「お嬢様、今變な黒い顔をした何處の國の人だか解らぬ人が來て何か申して居りますが、私には少しも解りません」と云ひますので。

「其れあ印度人に違ひないわ、行つて見ませう」と又皆で入口の方に行きました、すると其處に居たのは矢張印度人でありましたが、魚屋の様に籠を

持つて、

「私印度人、澤山面白いありますタツタ二十錢あります」と云つて居ります。

娘等は何だか少しも解りません、互に顔を見合せ乍ら、

「二十錢出せば何か買へるのかしら」

「いや何か藝をするのでせう」等と云つて居ります、すると一人の娘さんは

「何でも二十錢出せば解るのではありませんか」と自分の巾着から二十錢出して印度人に渡しました。印度人は金を貰ひましてお禮をし、聴て笛を取り

り出だし、はち巻をして踊でもする様な様子です、

「踊なんか嫌だわね——」

「二十錢も出して」と又娘等は云ひ出しました

「まあ黙つて見て居ませう」と一人が云ひ出しましたので又皆な黙つて終ひ